青い壁

タコヤキ

青い壁　八月三十一日

八月三十一日

　残暑がまだまだ残る蒸し暑い夜、高校二年生である成瀬智也は家で暇を持て余していた。
　予備校と学校が押し付けてきた課題は昨日のうちに全て終わらせ、夏休み最後の日である八月三十一日を智也は怠惰に過ごしていた。
　クーラーの効いた快適な部屋で寝転んでいた智也は何気なく机に置いてある読み終わった小説に手を伸ばし、ページをパラパラとめくっていた。
　成瀬智也はきわめて一般的な高校生二年生である。短くも長くもない髪で、自分でも納得がいくほどの特徴のない顔つきだ。ある意味それが特徴ともいえる。
　智也が読んだ本は最近よく新聞に載るある田舎の学校が舞台の青春小説だった。世間では涙なしでは語れないストーリーと騒がれていたが、生憎智也には感動も共感もなく、知り合いとの話の種にはなるかという程度のものだった。
　智也は暇なときには小説を読んだりしている。自慢できるほどではないが智也の唯一の趣味でもある。読むもののジャンルは小説が多い。
　智也は本をめくりながら、明日から嫌でも再開となる学校生活のことに頭を巡らせていた。
　学校生活に思いを巡らせても湧き出てくる感情は面倒くさいという単純な心情であった。智也はクラスメートとは特別仲が悪いということはないが、時折彼らが煩わしく感じてしまうときがある。別にクラスの人間が嫌いなわけではない。友達と呼べる人はそれなりにいる。ただうまくは言えないが、智也はクラスという団体、群衆、集合の中では言いようのない違和感があった。自分が自分でないあやふやな感覚。妙な浮遊感、思春期特有の感じ方の一つと言われてしまえばそれまでなのだが、とにかく智也はこの違和感をぬぐいきれず、おまけにそれに対し嫌悪感もあった。そんな風に感じてしまう智也が明日からの学校生活を歓迎できるはずがなかった。だがこれは些細な問題であり別段深刻になることではなく、智也自身おもわず吹き出してしまいそうなくらい、くだらない話にすぎないのであった。一人が好きで、騒々しいのが好きではないだけである。
「何を考えているのだか……。」
本を机に放り投げ、見慣れた天井を見つめる。
「……」
　智也は深いため息を吐き出し、目を瞑る。
「―」
　暑く、ジメジメした感覚が智也の体を這いずり回る。クーラーがかかっているこの部屋でそんなものは感じることはないはずなのだが、なんともいえない不快感があった。
その不快感を認知してしまった智也はイライラして、残っていたぬるい麦茶を飲みほし、気分を変えるためにテレビをつけた。適当にチャンネルを回していると、ここ最近人気があるといわれているバラエティ番組にチャンネルを固定した。

「……」
　とてもつまらない。観客はタイミングを合わせたように笑っている。言っていることも絶望的に面白味がない。見ている自分の正気を疑いたくなるほどであった。
　そんなことで時間は過ぎ、ふと時計をみると針は午前一時を指していた。明日は夏休み明けの初の学校である。
　さすがに初日から寝坊はしたくなかった。智也はそう思い、今まで感じていた不快感を無視しようと心に決め、部屋の電気を消しベッドに入った。あまりにも怠惰に任せすぎていたのか、すぐに眠気が襲ってきた。まだ眠りたくはないな。そんなことを微睡に飲まれながら、智也は思った。そして眠気が智也を包み込んだ。智也は消えてくれなかった違和感とともに眠りへ堕ちていった―。
　明日なんて来なくていいのに―

青い壁　九月一日

九月一日

　一暑い。
　久々に着た制服は不快極まりなかった。肌にまとまりつく汗を吸い取ったシャツ、容赦なく降り注ぐ太陽の日差し。
　ただでさえ不快な夏休み明けの登校だというのに、より一層の不快のスパイスをしみこませていた。
　智也が住んでいるところは、静かな住宅街である。少し歩かないとスーパーやデパートといったものはない。また繁華街や智也が通う予備校は自転車で二十分以上かかる。学校はそういったところから少し離れ、少し山なりになっているところにある。智也は学校にはバスで行く。智也の学校は自転車通学が多くバス通学の生徒が少ないのでバスの中は通学で混むようなことは滅多になかった。智也は朝をゆっくり過ごしたかったのと、のんびり座っていきたいという気持ちが強かったので、多少時間はかかってしまうが、バス通学を好んでいた。
　ついさっきまでは冷房が効いたバスの中で少しうたたねをしていた智也であったが降りてからは足取りが重くなった。
　バスから降りて学校まで五分ばかり歩くのだが、その五分ばかりの歩行の時間でさえ苦痛に感じるほど今日の残暑はひどかった。夏休み明けの最初の登校でもあるのでよりいっそうに苦痛を智也は感じた。
「……」
黙って足を動かすことだけを考えた。そう決意した時に、知っていた声が智也の耳に入ってきた。
「よー、智也、久しぶり。」
肩をたたかれ、仕方なく振り向いて返事をする。
「……翔太か。」
高原翔太。一応中学の頃からの付き合いで智也の友人と呼べる人物であった。
「ひどいな、今日の暑さは……。」
「うん、ひどい……。」
　普段はそれなりにおしゃべりであるこの友人でもこの暑さでは口数も減っていた。約二週間ぶりの再会で少しは弾むはずであろう会話も暑さによる気怠さに押し流されていった。
「夏休み終盤は何をしていたの？」「予備校だよ。」「進路とか考えた？」「少しは。」と、なるべく言葉数を少なくして、会話を続ける。二人にはこれで十分だった。
　翔太はおしゃべりな方であり、友達も多い。智也とは中学の頃出会い、大人しくしていた智也に翔太がやたら話しかけてきて、そこから智也も気が付かぬうちに、友人といえる関係になってい

った。中学からクラスが一緒で、時々鬱陶しい時もあるが今では智也の中でも気が知れた相手であった。翔太は自転車通学なのだが、学校から少し離れたところにある駐輪所に自転車を止めている。そして学校の校門に徒歩で向かうのだ。翔太が智也の隣に並ぶ。

アスファルトの坂道をひたすら歩いていく。智自分たちと同じ制服を着た生徒たちを横目で何度か見たが、青春中の輝くような目つきをしているものは今日では皆無であった。隣の友人に至っては、暑い、だるいとひたすらに繰り返すマシーンと化している。

暑い中の坂道を上り数分、自分たちの校舎が見えてきた。ここまでくれば多少は足取りも軽くなってくる。そうしたら次第に校門も視界に入ってきた。

二人の教師が校門の前で生徒たちを出迎えている姿が見えた。こういったことに引っ張られるのは体育教師と相場が決まっているのか、無駄にでかい声で登校する生徒にあいさつしている教師の声が智也たちの耳に入ってくる。この暑さでは鬱陶しいことこの上なかった。「なんであんなに元気なのか……。」と、翔太がぶつぶつ言っている。

やがて智也たちが校門に到達すると、教師のスピーカーのような声が近くで発せられる。智也たちは軽い会釈をし、校門を逃げるようにくぐりぬけ、外よりもかろうじて過ごしやすいはずである教室へと向かっていった。

教室に入ると、一か月半前と変わらない風景があった。少し変わっているところといえば、夏休み明けということで積もる話があるのだろう、クラスメートはいつも以上におしゃべりになっていた。智也は目があったクラスメートに挨拶し、翔太と別れて自分の席に向かった。

ここに来るまでにかいた汗が多少不愉快だったが、席に着くとだいぶ歩いてきた時より楽になり一息つけた。智也は手でシャツの下に風を送りながら、ぼんやりと今日のことを考え始めた。

今日は夏休み明け恒例の始業式である。我が校の校長のありがたくためになるお話を拝聴する予定であるが、この手の行事はどこもやることは変わらないのがほとんどである。智也たちにとっては面倒なこと以上の意味はなかった。

特にやることもなく、まだ始業までには時間があったので、智也は話しかけてくる数人のクラスメートと相手をしていた。

すると、教室のドアがガラガラっと空き、教室が少しだけ静かになった。智也のクラスの担任が教室に入ってきた。「お前ら早く座れー。」と教室に入ってきた少し背の高い男から、寝ぼけたような声が発せられた。

―滝本卓。

智也たちの担任である。あと少しで三十路に突入する年齢であるらしいのと、呆けた顔という特徴らしくない特徴を持っているのが智也のクラスの担任である。担当教科は数学だ。基本放任主義であり、身なりからわかるように教育に対する熱意は砂漠のように乾ききっているような態度の持ち主である。だが、智也たちには小うるさいことを言わず、面倒でもない教師として生徒たちからは敵意を持たれているわけではなかった。

そういった意味では生徒たちからはいい先生であった。その滝本先生から体育館得へ行くよう

にとの指示が出された。みんなしぶしぶと体育館への移動を始める。終わったらさっさと帰って予備校の課題でもしようかと思いながら智也もしぶしぶと席を立ち体育館へ向かった。
　そして智也は暑い中の始業式にじっと耐え、教室に戻り、今後の日程を聞きいて、家に帰った。

九月九日

　学校が始まって一週間以上が過ぎた。
　これまでと変わりなく、夏休み前の退屈な授業を消化する日々になった。だが、一つだけ一学期と変わったことがあった。そのことはクラスメートには驚きのことでもあったが、あまり歓迎されるようなことでもなかった。むしろ嫌なことに分類される類のものだった。
　―それは一之瀬拓真が毎日学校に来ていることだった。
一之瀬拓真は少し長めの髪と中性的な顔立ちをしており、一般的には女子にそれなりに受けそうな顔立ちであった。だがそんな印象も最初だけであった。
　彼は一学期にあまり学校に姿を見せなかった。担任である滝本によると、諸事情によりとのそっけない答えであった。だがそれは不登校というわけではなく、週に一度ぐらいは学校にその顔を出していた。それでも午前の授業のみとか、早退とかという具合だったのである。だが最初の中間テストの結果で智也たちは驚かされる羽目になる。一之瀬拓真は中間テストで校内トップクラスの成績だったのである。その結果を見た生徒は誰のことかわからなかった。そしてようやく一之瀬拓真の名前を認識したのである。その後のクラスは一之瀬の話題でいっぱいだった。そして中間テストの成績優秀者発表の後、彼が初めて姿を現したのである。
　―そしてその日、クラスの生徒が抱いていた一之瀬に対する印象が百八十度変わってしまうことになった。
　その日、珍しく一之瀬が登校した。智也はその一之瀬の姿を視界にとらえた。不思議な青年であった。背はあまり高い方ではない。体は細めで、触れてはならないような、そんな神聖な雰囲気があった。彼が教室に入ったら、その場が少し静かになった。だがすぐにそんな静けさは打ち破られた。それもそのはずで、噂のその人がきたのでクラスメートはワイワイと、彼に押し寄せ、生徒に囲まれてしまった。そして彼にプライベートやくだらない質問が投げかけられた。その中心にいる一之瀬はその中でも際立って特殊だった。同じ年とは思えないような少年のような顔つきであった。そんな彼は静かにゆっくりと下がっていた視線を上げ、透き通った奇麗な声で言葉を発した。
「邪魔だからどいてくれる？」と―、
―静寂があたりを支配した。
　みんな言葉を失い、ぽかんと口をあけているものがほとんどだった。この時智也は教室の隅で翔太と一連の流れをなんとなく眺めていたが、二人とも面を食らっていた。
最初に行動を起こしたのは、我がクラスの委員長だった。
「ねぇ、そんな言い方はないんじゃないの？」
　静寂を破り少し甲高い声が聞こえてきた。声の主は春原涼香だった。春原は気は少しきついが品

行方正で、成績も優秀であり、家柄も良く、教師からの評価も高い優等生であった。
「……。」
　一之瀬は春原へ返事もせずに、席に向かい静かに座った。絵になるようなはかなげな光景だった。彼は黙って空を眺めているようだった。
「ねぇ、無視は失礼じゃない？」
と、気の強い菅原は無視されたことが癪に障ったのか、一之瀬につっかかり、肩に触れようとした。だがその時、一之瀬の切り裂くような声が響いた。
「やめろっ！」
　一之瀬は菅原の手を振り払った。
「きゃっ……。」
　一瞬だが彼の奇麗な顔立ちがすごい形相と化していたのを智也は見逃さなかった。これには菅原も面を食らい、呆然としている。
一之瀬ははっとして、すぐに奇麗な顔立ちに戻った。その変化に気が付いたのは智也だけだった。
「ごめんなさい。僕の態度が気に障ったのなら謝ります。でも僕には話しかたり触れないでほしい。お願いだ。」
　一之瀬は詩でも歌っているような、でもどこか機械的な澄んだ声で言葉を紡いだ。春原も我に返り、何か言おうとしたが、一瞬早く一之瀬が動き出し、「今日は早退します。さようなら。」と言い、まっすぐに教室から出て行った。
―再び静寂
　だれもがあっけに取られていた。春原にいたっては「何よ、あいつ・・・・・・。」と、悪態を隠さないでいた。そうして滝本の登場によってようやく硬直した空気が弛緩したのであった。
　それからも一之瀬は学校に来たり来なかったりであった。当然一之瀬に話しかけるような人間は一人もいなかった。村八分というわけではないが、立ち寄る人間はいなかった。それもそのはずで、一之瀬の近くの席である人間の話によると一之瀬は授業中に、急に薄ら笑いを浮かべて机に絵をかいたりして、気味が悪いというううわさも耳にすることがある。
そんな話もあって一之瀬は周りから気味悪がれていた。何人かの物好きが一之瀬に話しかけたりすることもあったが、例外なく無視されたのでクラスも徐々に興味を失っていった。
そして一之瀬が学校に来るのは、週に一度というペースだったので、いじめなど問題にはならなかった。むしろみんな気にしないようになっていった。
　―だが
　その一之瀬がここ最近は毎日のように学校に来ている―。
　これが一学期と大きく変わったことだった。
　だが智也は同じクラスとはいえ、一之瀬と関わりがあるわけでもないので、いつものように淡々と日常を過ごしていた。心境の変化があったかは図りようもないが、一之瀬は相変わらず、誰ともコミュニケーションをとるそぶりは見せなかった。時には突然姿が消えているときもあったのだが、だれも気に留めている者はいなかった。どこに行っているのかも分からなかった。

　そんな変わったこともあったのだが、日常は大きく変わっておらず、暑さも続いていた。雨も降る気配もなく、ただ時間が過ぎていくだけであった。

青い壁　九月十七日

九月十七日

　夕方の図書室。生徒たちは部活か放課後の遊びに精を出しているまだまだ暑い夏の中、智也は担任の滝本と面談をするために図書室で暇つぶしをしていた。暇つぶしと言っても予備校の勉強である。
　夕方にもなると図書室にいる生徒などは智也以外には、図書室の先生がパソコンを眺めている姿しかなかった。面談というのは、智也の進路のことである。
　一応、それなりの優等生で通っている智也だから成績自体は全く問題なく、一学期のテストの順位も上位層に入っていた。今日の内容の面談は保護者抜きの面談で、文系か理系かといった調査であった。
　何もそんなにせっぱつまって決めるものでもないだろうに、とおもわずため息がでる智也であった。
　一応、滝本には国立文系志望を報告するつもりだ。別に数学や化学などが苦手なわけではない。
　理由は二つある。一つは英語が小学生のころから塾に通わされていた賜物なのか、英語は対して勉強をしなくても高得点をキープすることができた。国語の成績も良い。それが理由の一つだった。
　二つ目は歴史が好きなことである。歴史というよりは歴史の人物が好きなのである。ただその歴史の人物、例えば、大久保利通が近代の日本にどのように影響を与えたのだとか、坂本竜馬がどれほど偉大な人物であるかといったものには全く興味がなかった。智也は歴史上の人物が、どのように世の中を思い、どのように死んでいったか、何を思って死んだのか、その人物は幸せだったのだろうかと想像したりすることが好きなのである。そのおかげかどうかは分からないが、こと歴史に関しては、智也は塾の全国模試でも群を抜けて成績が良かった。
　以上の理由から智也は国立の文系志望であった。両親にも報告済みのことである。
　智也は勉強の手を止め、時計を見た。
　　五時十分―。
　滝本との面談は四十分からである。まだ職員室に行くのは早すぎる時間帯だ。だが、予備校のテキストも丁度キリのいいところなのでこれ以上勉強を続ける気にもなれず、終わりにすることにした。
　「さて……。」
　こった肩を鳴らしてあと二十分なにをするか考智也は考えることにした。
「本でも見てみるか……。」
　ここは図書館であるので、智也は何か面白そうな本はないか探索することにした。
　智也は席を立って、小説コーナーに向かった。ざっとタイトルに目を通していくが、あまり興味をそそられるようなものはなかった。智也は日本の小説や文学しか読まないのだが、この学校の図書館には教科書に載るような作家の本しかなかった。

智也はため息をつき、どうしようかとしばし逡巡した。
そして、智也は少し趣向を変えて海外文学がある棚に向かうことにした。完全に気まぐれであった。
この図書館の文学関係の本の棚は、日本文学と海外文学とに別れていた。
海外文学がある棚、はちょうど本棚が並べられてあるところの、丁度直角にあたるところを曲がったところにある。智也がその直角の所に足を向けた途端、ふと人影が見えた。
その影が揺れている。
智也は気が付かなかったが、だれかいたのだろうか。
と、智也はその人影の顔を見ようとして足を進めた。そしてその陰の横顔を見てふかくにも呆然としてしまった。
「一之瀬？……」
しまったと思った時にはもう遅く智也は一之瀬の名前を口に出してしまった。
「―。」
一之瀬は少しだけ顔を上げたが、いつも通りですぐに興味なく視線を逸らした。相変わらず整った顔立ちである。女子たちが噂するのも納得がいく。だが、そんなことはどうでもよいことだった。智也はなにを言っていいのかわからなく、言葉を発せないでいた。ふと、一之瀬が持っている本のタイトルに目が行った。
「―ヘルマン・ヘッセ？」
ドイツの小説家かなにかだったかな、と智也は頭を巡らすが、それ以上のことは思い浮かばなかった。
「海外文学が好きなの？」と、口を開こうとしたら、奇麗な瞳を向けられ、
「どいてくれるかな。」
と、あいさつでもするように慇懃な態度で一之瀬は口を開いた。
「あ、あぁ…。ごめん……。」
智也はおどおどとはたから見たら情けない態度で答えた。彼の特殊な雰囲気は相手に踏み込ませないような何かがある―。そんな雰囲気をまとっているな。と、智也は体をどかしながら、流暢にそんなことを思った。嫌われているのだろうか。
智也に一瞥もせずに一之瀬は智也を避けて、まっすぐに図書室から出て行った。
「なんだよ、あいつ……。」
不思議な感覚だった。あまり人付き合いが多い方ではない智也だが、本当に彼は他の奴とは違うものだと感じた。だが、その雰囲気はなにか自分の心をくすぐるようなものがあった。それが何なのかは智也には検討もつかないが―
「……。」
呆然としていた智也だったが、当初の目的を思い出し、時計を見たら丁度長い針が六を指して、三十分を示していた。
「面談行かなきゃ……。」
もやもやした気持ちをなんとか心から追い払い、智也は荷物のある席に戻り、素早く片づけをし

て図書室をでて、職員室へと向かった。
面談が終わり学校を出ると少し暗めの夕焼けが空を覆っていた。その日の面談は何を言われたのか何も覚えていなく、一之瀬の不思議な印象が智也の頭を支配していた。

青い壁　九月二十三日

九月二十二日

　一之瀬との遭遇から五日が経った。智也の頭の中にはほとんど一之瀬のことは頭になかった。教室で一之瀬の姿をたまに目をやってしまうときが度々あったが、彼はいつも通りの無関心の態度を貫いていた。ただ単に変な奴であるだけなのかもしれないな―。成績ダントツトップになる頭脳を所有していると考えていることも自分たちとは一線を画しているのだろう。ここ数日で智也はそのように結論づけていた。そんな思考の流れから、一之瀬のことは目が行っても気にしないようになっていた。
　そんなことよりも今日はとても気分が悪く一之瀬のことなど全く頭に出てこなかった。今は予備校の帰りである。もうあたりが暗くなっているが、涼しさは感じない。そのくせ夏の暑さはまだ懲りずに残っておりジメジメしている。
「―くそっ。」
　腹いせに道端の小石を思いっきり蹴ってみる。思ったより遠くには飛ばなかった。
なぜこうも腹が立っているのかというと、予備校での講師の面談が原因であった。英語の講義が終わったのでいつも通りに帰ろうとしたら、講師に呼び止められたのである。何の話かと思ったら、進路のことであった。その話がとても長い上に、智也にとっては不愉快極まりない内容だった。―君はまだ余裕があるように見える、君がもっと頑張ればさらに上の所に行けるだろう、ひとつでも上の学校に行った方が良い将来があるぞ、授業数をふやしてみたらどうかね、君には期待している、君はまだまだ伸びる、いい大学にいけるなどと、そんな言葉をひたすら浴びせられていた。

　智也はこの手の応援や激励は生理的に毛嫌いしていた。とにかく不快である。おまけに昨日も似たようなことを両親にも言われていた。智也だって言い分は理解しているし、将来的な事や世間体などを考えると間違っていないとも思っている。だがそんなことは前々からさんざん言われてきたことだった。本当に鬱陶しかった。やることはきちんとやっている。文句のない成績もとって結果もでている。学校での評判も、予備校での評判も悪くない。だが別に好きでやっているわけでもない。目標なんてあってないようなものだ。だからほうっておいてほしい。うるさいのは嫌いだ。あげくに言っていることは不快だ。だが、周囲は飽きもせずに繰り返し囁く、もっとがんばれ、君ならできる、呪いのような無責任な激励の言葉を繰り返す―。そしてそれらの言葉が智也の許可なく体を葉這いずり回っているようにまとわりつく。やめてほしい。これ以上自分に品行方正な価値観を押し付けないでほしい。もう十分だろう。本当に。

　―気持ち悪いな……。

　吐き気がした。このまままっすぐ家に帰る気力は今の智也には持ち合わせていなかった。今は虫

の音にすら頭にくる。足を止めて深いため息をつく。
「どこか寄り道でもしていくか……。」
　智也は少しばかり逡巡した後、いくつかの候補が挙がった。人がいないところがよかった。そう考えると考えがおのずと決まった。ここから少し歩くが、智也が子供の頃によく遊んだ河原へと足を運ぶことにした。反転して、河原に向かった―。
　―やっぱりここに来ると落ち着くな。
　智也は河原到着したらしばらく寝そべっていた。その心地よさに目を閉じながら身を任せていた。背中にある草がチクチクとくすぐったいが、住宅街なんかよりも涼しく、川のせせらぎも心地よく耳に入ってくるので、さっきまでの粘りつくような不快感はほとんど消化されていた。
　目を開けると星が見える。今日は少しばかり曇って入るが、それでも晴天と言って差し支えない空であった。普段は星のことなんて気に留めもしないが、ここにきて空を眺めると、都会の空とはいえ、感嘆せざるを得なかった。
　この河原は智也が子供の頃から遊んでいた、お気に入りの場所であった。都市開発やら、なんやらで昔遊んだ公園などはなくなってしまうことが多いのだが、ここは智也が子供の頃と何一つ変わっていない場所であった。昔から、悲しくなったり、怒ったりして心に行き場所がなく、負の感情をため込む以外に術がない時には、この河原に来ていた。
「―ここはいつも静かでいいところだな。」
　たまに吹く風が智也の前髪を揺らしていく。このまま眠ってしまいたいほどだった。もうあたりは暗いので本当に寝てはあまりの心地よさで、ここで朝を迎えてしまうことになってしまう。流石にそれはよくないことなので、上体を上げ、河原を見ることにした。闇が覆っているが、川の音は自然と智也の心を安らげ、安堵感を与えていた。
　だが、川を眺めているとふと闇の中で何かが動いているのを智也は知覚した。
　―誰かいるのか？
　あたりは暗い。この河原で光となるものは月と星だけだ。闇の中の得体のしれないものがゆっくりと動いている。
　―やっぱり誰かいるみたいだ。
　危ないやつではないという保証はどこにもないということは承知している。ただ、なんとなくその人影のような姿が気になっていた。なぜなのかは智也自身にもわからなかった。
その人影がもう近くまで来ていた。あたりは不気味なほど静かだった。虫の音が相変わらず心地よく鳴り響いており、風情である。これが不審者だったら、逃げた方がいいよな、と呑気に構えていた。雲が月を隠していた。その雲が智也も気が付かぬうちにゆっくりと月の姿を現していく。そして少しずつ現れた月の光が川の水に反射し、その人影の顔を照らした。
「……一之瀬拓真？」
「……成瀬君？」
　智也は驚愕した。一之瀬がなぜかここにいることよりも、自分の名前を一之瀬の口から発せられた事実に驚愕したのである。それに加え正直自分の名前が憶えられていることにも驚きを隠せなかった。少しだけ無言の時間が流れる。智也がどうしてここに―？と聞こうとしたが、先に言

葉を発したのはなんと一之瀬であった。
「もしかして成瀬君、ここが好きなの？」
「―。」
驚いた―。
てっきりまた冷たい態度で、どけ―。とか言われるのかと、智也は身構えていたのである。少し頭が混乱したが、智也はなんとか返事を出した。
「う、うん。ここ子供のころから気に入っている場所だよ―。」
また無言の状態が少し流れる。一之瀬は今迄見たこともないような子供のような顔で智也が発した言葉の意味を考えているように見えた。
一之瀬がゆっくりと口を開く。時の流れがここだけ変わったようだった―。
「そうか……。成瀬君もここが好きなんだね―。」
―開いた口がふさがらない。実際にはそこまでまぬけな顔をしていたわけでもないと思うが、心情的にはまさに開いた口がふさがらなかった。
―一之瀬が笑っている。
智也は見ているものが信じられなかった。あれだけクラスメートを拒絶し、感情なんて露の欠片も見せないでいた一之瀬が、自分の目の前で微笑んでいるのだ。驚くのも当然である。
「う、うん…。一之瀬もここが好きなの？」
智也が言葉を返す。
「うん。ここはとても静かなところだからね。」
「そうだよな。ここは静かでいいよな……。」
一之瀬と会話が成立している。一之瀬を知っているクラスメートがこの場を見たら、明日には噂になってしまっているだろう。
「僕は最近この場所を見つけた。成瀬君は子どもの頃からここを知っていたのなら、僕は後からここに来た人間になる。そうなると、僕は成瀬君の場所に勝手に入ってしまったことになる。だから謝るよ。」
「えっ、そんなこと気にしないよ。第一ここは別に僕のものじゃない。謝る必要なんてこれっぽっちもないし、後とか先とかなんて関係ないよ。この場所が好きならそれでいいと思う。気にしないで。」
やっぱり変わっているな―。
と、智也は思ったのだが、不思議と嫌な気持ちはしなかった。この場所による吊り橋効果もあるのだろうか。
智也もそうなのだが、一之瀬も学校よりも気分がよさそうであった。
「そう？ありがとう。それにしても嬉しいな。」
「嬉しいって、何が？」
「この場所が好きである人が成瀬君のような人で嬉しいよ。」
「よくわからないけど、とりあえずありがとう。」
「こちらこそ。」

　一之瀬の言っていることに戸惑う智也であったが、それでもやっぱり嫌な感じではなかった。それにしてもここにいる一之瀬が、いまだに学校での近寄りがたい一之瀬と同一人物とは思えなかった。
「そうだ。成瀬君なら多分気に入ると思う場所があるんだ。そこは君がここをお気に入りにしているように、よく行く場所がもう一つある。僕だけがここのように素晴らしい場所を二つも知っているのはなんだか不公平な気がしてならない。独占しているみたいだ。だから僕は成瀬君にも知ってもらいたい。どうかな。」
「それは興味あるな。いったいどこなんだい？」
「それはまだ秘密だ。ここで言ったら味気ないしね。」
「ぜひ知りたいな。」
　智也は自分でもびっくりしていた。あの一之瀬とここまで会話が弾むとは夢にも思わなかった。おまけに次の約束も成立しそうである。
「そう？ならそうだな。明日の放課後、図書室で落ち合おうか。」
　一之瀬は少し含みがある笑顔で言った。
　図書室と言えば偶然とはいえ、初めて一之瀬と顔を突き合わせた場所だった。あの時のことを思い出したら、口元が緩みそうだった。
「あの時は悪かった。つい、いつもと同じ感じで口を滑らしてしまった。」
一之瀬もわかっているらしい。
「別に気にしていないよ。どうせなら文学コーナーのところで待ち合わせしようか。」
　智也も少し不敵に笑いながら言う。
「それはいいね。そうしよう。」
一之瀬も笑う。楽しそうであった。
「じゃあ文学コーナーで。それと水を差すようで悪いけどももう遅いから帰らなくちゃいけない。一之瀬はこれからどうする？」
「僕はもう少しここにいるよ。」
「そうか。なら暗いから気をつけて。」
「うん。じゃあ、明日―。」
「あぁ。」
　智也は一之瀬に背を向けた。一之瀬の好きなどんなところだろうな―。智也は自分でも築いていないが、明日を楽しみにしており、口元が少しばかり笑っていた。もう、予備校のことなどすっかり忘れてしまっていた。
「成瀬君。」
後ろから声がかけられる。少しばかり後ろを見る。
「久しぶりに楽しかった。ありがとう。」
智也は少し驚いてとっさに反応できなかった。そして少し遅れて智也は笑った。
「僕も楽しかったよ。」
と言って、すこし早歩きで、コンクリートの道路に向かっていった―。

今夜は三日月で、とてもきれいに夜空に輝いていた。そしてその光はまだ河原にいる一之瀬を照らしていた―。

青い壁　九月二十四日

　九月二十四日

　放課後になった―。いつもならまっすぐに家に帰るところなのだが、今日は一之瀬との約束があった。
　少しぼーっとしていたらと翔太が駆け寄ってきて、一緒に帰ろうと誘われた。翔太はサッカー部なのだが、今日はたまたま練習が休みらしい。もともとこの学校のサッカー部はそんなに強くない部であるそうなので、部員もそこまで本気でやっているわけではないらしい。
　智也は今では帰宅部だが、中学では陸上部の短距離で活躍していた。特別優れた選手であったわけではないのだが、大会にも参加したこともある。なにより走るのは嫌いではなかった。今でもたまにランニングをしたりする。
「ごめん、翔太。今日は学校で用事があるから遅くなる。」
「えー。ついてないな。でも仕方ないか。あっ、忘れるところだった。お前から借りた漫画今日持って行った方がいいか？」
「いや、今日はいいよ。明日以降で。」
「了解。んじゃまた明日な。」
「うん。」
そうして翔太は教室を出て行った。
　智也は一息つくと、今日の予定を反芻してみた。少し前ならば考えられないことである。今日も一之瀬は誰とも口を利かずに一日を過ごしていた。その表情は、河原で見た時とは別人のようであった。クラスが嫌いなのだろうか。そしてなぜ自分に話しかけてきたのだろうか。どちらにしても普段無愛想で慇懃無礼の一之瀬が、自分にコンタクトを持ちかけてきたのだ。それも一之瀬から。このことがクラスや翔太にばれてしまったら、ちょっとした、いやかなりのニュースになっているだろう。それに、紹介したい場所とはどこなのであろうかと、考えることは少なくなかった。
「行こう……。」
　智也は図書室に向かった―。

　―図書室。もう少しで空に橙色の光があらわれそうな時間だった。あの時一之瀬と会った時より一時間ばかり遅い時間―。
　まだ一之瀬は到着していないようだった。ほかの生徒の姿も見えない。じっとしているのも暇であるので、この前一之瀬がいた海外文学コーナーに足を運んだ。
　たくさんある本の中から一冊手に取ってページをめくる。手に取っているものは、ヘルマン・ヘッセの「デミアン」である。これは一之瀬が前に手にとっていた作者の本である。智也にはあまりなじみのない分野だった。なんとなくだが、こんな本を読んでいるあたり、一之瀬は学年トッ

プの秀才さをあらわしているような気がした。
　本を棚に戻したところで、人の気配を感じた。振り向いたら一之瀬がそこに立っていた。ちょうどこの前とは立ち位置が逆になっている状態である。前と違うところは、一之瀬が柔らかな笑みを浮かべており、智也に話しかけているところであった。
「ごめん。成瀬君。待たせかな？」
今度は驚かなかった。智也は一之瀬に落ち着いて顔を向けた。
「いや、ちょっと前に来ただけだよ。」
「そう、それはよかった。それならさっそく向かおうか。」
　と、一之瀬は背中を向けて歩き出した。意外とせっかちなのかもしれない。実は今日、一之瀬は学校を昼からは保健室に行って休んでいたらしく、ホームルームにはいなかったので、智也は少し心配していた。本当に図書室に来るのかと―。だが智也は不思議と一之瀬は来るだろうなと確信めいたものがあった。だからそんな漠然とした不安はすぐに消えてしまっていた。このことは智也自身不思議に思った。
「うん。よろしく。」
　智也は一之瀬の背中を追って歩き出し、図書室を後にした。
「ところで、一之瀬が紹介したい場所って学校の外？」
　智也が質問した。一之瀬は少し笑って、
「いや、一応学校だよ。」と、答えた。
「そうなの？」
「うん。ついてきて。」
　そういいながら、廊下を少しわたり、階段をどんどん登って行った。この学校は全部で四階まである。その四階にまで到達しても、一之瀬は階段を上ろうとしていた。ここまでくれば智也にも予想がついた。そしてついに階段の終わりに到達してしまった。あっという間であった。
「ついたよ。成瀬君」
「屋上か。でも、ここは生徒には立ち入り禁止で、しかも鍵がかかっているはずじゃ……。」
一之瀬は得意げにポケットからあるものを取り出した。鍵である。
「それ、ここの？」
「そうだよ。」
　どういてそんなものを持っているのか―。学校の施設の鍵は職員室で管理されていて、生徒が持ち出しできるものではないはずだった。校則違反―。下手したら窃盗に近いものになるのではないかと智也は危惧し、少し心配になった。
　だが、一之瀬はそんなことを気にも留めていないのか、楽しげにその鍵を鍵穴に突っ込んだ。カチャリ、と心地いい音が静かな学校に響いた。
「さ、どうぞ成瀬君。」
　一之瀬はそう言って、自分の宝物をこれからみせるようにゆっくりとドアノブを回していった。
　扉の隙間からあふれる光―。その光が徐々に広がり、大きくなっていく。やがてその光は智也の全身を覆い尽くした。

「―。」
　そこには青い空があった―。屋上なのだからあたりまえのことなのだが、いつも地面から見る空とは違うものに見えた。いや、空を意識したことなんてあの河原以外では皆無だった。その空に今目を奪われる。何も考えはない。ただもっと空の中心に行きたくて、一歩屋上に足を踏み入れた。そしてその中心へと足を進める。そしてその中央に立った。
　空が近くに感じた―。
手を伸ばせば届きそうな空。実際には届くはずのない空。この時の智也の頭の中は空っぽだった。校則違反とかそんなことはどうでもよかった。ただこのなにもない青い空を眺めた。
　気持ちがいい―。
　少しだけ風を感じる。その風が智也の前髪を揺らしていく。智也はただその風を全身に感じる。あの河原と似たような雰囲気なのだろうか。ここには余計なものが一つもない。この屋上は危険防止のためにフェンスで周りが囲まれており、景色を見るときはフェンス越しであった。
　―フェンスなんてなくていいのに。
　智也はそこが少しだけ残念に思った。だがそらでも十分開放感があり、心地いいところである。
　余分なものはなく、あるのは風と空だけであった。
　―なるほど。確かにここはいいところである。
　智也は空に心を奪われたかのように上を向いていた。
一之瀬の声がようやく智也の目を空から引き離してくれた。智也はやっと一之瀬に気が付いたかのように、ゆっくりと視線を空から戻した。実際には短い時間だったのだろうが、智也には長い時間空を見ていたかのように感じられた。
「気に入ってくれたみたいだね。」
　一之瀬が囁いた。
「うん。気に入った。」
　それ以上の言葉は無粋だった。もう一度空を見る。智也はあの河原の時のように腰を下ろし、横になった。視界には空以外何もない。しばし二人は空を眺めた。しばらくたったと感じふと智也は一之瀬に尋ねてみた。
「ここにはよく来るの？」
「うん。夕方になる時が一番素晴らしくてね、この時間帯によく来るよ。」
「そうか、もうすこしで夕方か。」
「うん。それまで何か話そうか。」
　智也はとりあえず気になったことから尋ねることにした。
「先生とかには見つかったこととかないの？」
「ないよ。ここはとっくの昔に閉鎖されたらしいから、鍵を職員室から持って行ってもなんともなかった。気にしていないと思う。」
　それは安全管理問題としてどうなのかと智也は思ったが、なんだかおかしくて笑ってしまいそうだった。
「いつからここに？」

一之瀬は少し考えた後、
「五月ぐらいからかな。」と、答えた。
「どこか落ち着けるような場所がほしくてね、ずっと探していた。」
「いい場所を見つけたね。」
「うん。」
　また静かな時間が流れていた。うっかりしていると気持ち良くて眠ってしまいそうだった。智也は眠気に逆らえずうとうとしかけている時、
「見て。あの夕日。」
　と、一之瀬が静かだが吸い込まれるかのような調子で智也にささやいた。
「ん……。」
　目をこすりながらゆっくりと瞼を明ける。橙色の光がうっすらと見えた。智也は体を起こしてその眩しすぎない光を見つめた。
「きれいだね。」
　ありきたりな感想だった。一之瀬は少し不満そうだ。
「あの光がゆっくりと、青を塗りつぶしていって、やがては暗くなり星が見えてくる。急がずに、ゆっくりと……。あの光ももう少しすればあっちの方に沈んでいく。それはとても美しくて、とても奇麗だ。そしてそれを何度も何度も繰り返していく。でもその美しさは決して色あせるようなことはない。だから僕はここが好きだ。それは教室や町の中ではとても見えづらい。建物が多すぎて光を遮ってしまうことが多い。星もとてもきれいに輝いているのに町では見えづらくなってしまう。だから僕はそういったものがないあの河原やこの場所がとても貴い場所に思える。こういった場所は今とても少ない。それはとても悲しいことに思えるよ。成瀬君もそんな風に感じないかな。」
　一之瀬はどこか辛そうな声で語った。
　智也はすぐには返答できなかった。一之瀬が言っていることがよく分からないだけではない。
　今まで見たことのないさびしげな一之瀬の声色と姿に少しおどろいたからだ。その姿は」はかなく、悲しげで、消えてしまいそうな姿だった。
　これが本当の一之瀬の姿なのだろうか―。
　一之瀬がここを好きなように、自分もあの河原が好きであった。その理由はただ雰囲気だけの問題ではない。
　智也自身にもわからないが、もしかしたら一之瀬と自分は似たような想いを抱き、似たような別々の場所を憩いの場として好んでいたのではないかと思った。そうして一之瀬はこの屋上の他にも、つまりはあの河原を見つけたのではないか。そしてなぜ自分があの河原やこの屋上のような場所を一之瀬と同じように気に入っているのだろうか。空や星、風といった自然なるものが別段好きであると意識は智也には特に無いように思う。自然と触れ合う―。
　例えば山登りや、河原で遊ぶことが智也は好きというわけではない。一之瀬の言うことや、感じていることが智也にはまだよくわからない。ただ、少しくすぶる思いが智也の心に生まれていた。それは智也にはまだはっきりと認識できるものではなかった。

「よくわからないけど、こういう場所が少なくなっていることは悲しいね。ここみたいに気持ち良くて落ち着けるところがないのは確かに嫌だ。」智也はゆっくりと答えた。
「そうか。なら一つ聞こう。君はここやあの河原以外で落ち着く場所があるかい？」
再び智也は考えた。
―ここやあの河原以外に落ち着けることができるか？
　普段の生活を思い描いてみる。まず真っ先に候補から外されるのは学校や予備校だ。
　この二つはあまりにもまわりの雑音が多すぎる。聞きたくないこと、どうでもいいこと、不快になること、中でも一番嫌なのはこの前講師に言われたような言葉だ。まるで自分の好きなものや、生き方を無視して標語のように語られる。社会的には奇麗であろう言葉。その言葉を教師や両親は自分の言葉でもないくせに、これが当たり前のような口ぶりでその不快な言葉を垂れ流す。そういった言葉や音が自分の意思にはかかわらず絶えず耳に入ってくる。耳をふさぐこともできない。なぜなら耳をふさいでしまうとなぜお前だけそうなのだ、みんなと違うのだ、空気を読めないのだと、おかしな奴だと思われる。そして周りから奇異の目で見られ、共同体のメンバー像とは違った、それもマイナスなイメージを勝手に周りは抱き始める。それだけならまだしも、事の大小はともかくそれがひどくなると、心理的、あるいは肉体的にも疎外されてしまうことがある。そうなるとその共同体で生きていくには苦しくなる。だから耳をふさげない。嫌な事でも耳を傾けそれに従う努力をしなくてはならない。そういったものひどくは鬱陶しく感じる。
　少し思考が脱線したがとにかく学校や予備校は論外だ。
　なら街はどうか。だがこれも微妙だ。なにせ人が多い。それならあとは自分の家しかなかった。この空間ならどうなのだろうか。智也の家庭は世間から見たらいたってこの国では普通と思われる形態であろう。父親は普通の電機メーカーのサラリーマンで名前は晴夫、性格は落ち着いていてよく穏やかな人柄である。趣味は小説を読むことで、よく智也は父から本を借りる。母親は週に三回のパートをしている、名は頼子という。普段は優しいのだが教育に関すると少し神経質になることが只々あり、智也の悩みのタネとなることが多かった。兄弟はいない。だが、時々母から口うるさく言われることもあるが、家族の中は決して悪くはなかった。ただ勉強に関しては少し思うところが智也にはあった。
　例えばテストや模試の結果が返ってきたりして両親の一喜一憂する姿を見ると気が滅入るときがある。親なりに期待しているのだろうが、ストレスになっていることをもう少し考慮してほしい。その上講師同じようにもっとがんばればいいところいけるなどとはっぱをかけてくるときがある。そして智也は成績に関してはこれで満足していた。成績も恐らく推薦がもらえるほどには保っている。志望大学も目処がついている。それなのに家族は上を目指せという。居間で飯を食う時にはそんなことが多い。だから居間も除外する。
　そうなると残ったのは自分の部屋だ。ここは一番多く時間を消費している場所だ。だから快適に感じられるように環境を整えようとするのは必然だ。部屋はなるべくきれいにしてある。勉強道具もなるべく机に置きっぱなしにしていることは少ない。そもそも勉強はなるべく予備校の自習室でするようにしている。自分の部屋では極力やらない。だがそれでも余計なことを考えてしまう時が度々ある。学校とかと比べるとマシというぐらいだ。そう考えると―。

「そうだね。強いて言えば自分の部屋だけど、本当はないのかもしれない。」
　夕日が段々と空一面に広がってきた。そろそろ暗くなり始めるころだろうか―。
「そうか。そう感じているのか。嬉しいけど、悲しいね。」
　どういうこと、と智也が訪ねようとしたらいつの間にか一之瀬が体を起こしていた。智也の顔の近くでチャリンという金属の音が響いた。
「その鍵はここのスペアの鍵だよ。君が良かったらいつでも自由に来てくれ。」
　その鍵を手繰り寄せて、手にとってみる。普通の鍵だった。
「今日は用事があるから帰るね。成瀬君。よかったらまた来てくれ。歓迎するよ。」
　一之瀬は笑っていた。少し不安になるような笑みだった。
「そう。僕はここでもう少しゆっくりしているよ。今日はありがとう。」
智也は体を起こして言った。
「この前と逆だね。それじゃあ、また。」
　そういって一之瀬は行ってしまった。もう一度空を見上げてみる。心地いい風が吹いていた。空を見つめる―。夕日がとても鮮やかで美しかった。この夕日ももう少ししたら暗くなっていくのかと思うとすこしさびしく感じた。けど、それはとても神聖で、美しいことのように智也は感じた―。
　しばらくしたら、智也は一之瀬からもらった鍵を使って屋上の扉を閉め、自分の家に向かった。空は少しだけ暗くなっていた。

青い壁　九月二十七日

九月二十七日

　今日も一日の授業のチャイムが鳴る。
　滝本が連絡事項を生徒らに告げると、後はいつも通りにみんな席を立ちあがり、散っていった。部活動がある生徒は足早にグランドや特別教室に向かう。この学校は部活動の数が他校と比べて多くないらしい。
　翔太の入っている運動部の花形の一つであるサッカー部が練習に熱心ではないのである。聞くところによればもう一つの花形、野球部も真面目にはやっているが成績は芳しくないらしい。ほかの所も似たり寄ったりである。
　帰宅部である智也は、いつもはまっすぐに家に帰るはずなのだが、今日は違かった。
　教室を出るときに翔太とすれ違った。「またなー、智也。」と、いつもの軽い態度で声をかけられた。「あぁ。じゃあね。」と普段よりもそっけない態度で答えた。翔太はそんな智也の態度も全く気にせずに、サッカー部の友達であろう、髪の長い男の奴と一緒に、教室を出て行った。
「……。」
　―昨日は予備校だった。だから放課後はすぐに家に帰って、準備をしなければならなかった。だが今日は違う。特に用事はない。いつもはすぐに家に帰って、本を読んだり、予備校の課題をやっていた。だが今日は違う。ポケットの中にある一之瀬から貰った、屋上のカギに触れてみる。特別なことはなくただ金属の冷たさを感じた。
　―屋上に行こう。
　それは何か特別な理由があるわけではなかった。智也には珍しいことだった。翔太に遊びに行こうと誘われる時も決して、智也自身から動いたことはこれまでほとんどなかった。自分から他人に対して動いたことがあるのは、特別な用事があるときだけであった。
　―自分でも少し驚いていた。何に惹かれているのかはわからない。ただ、空を見たいと思っただけ、そしてあいつとまた話してみたいと思っただけであった。
「行こう。」
　そうつぶやき、智也は静かに席から立ち上がり、教室をでていつもとは違う、屋上に向かう廊下を歩いて行った。
　少しだけ周りを見渡す。教師や生徒の姿は見えない。もうこの時間になるとほとんどの生徒は帰宅しているか、部活に精を出しているかであった。教師も職員室に戻り、よく知らないが、各々自分の仕事をし始めようという時間だと思われる。
そして周りに誰もいないことを確認したら足早に屋上へ向かう階段を上って行った。そして扉の前にたどり着いた。自分のポケットの中にある鍵を取出し、ドアノブに差し込んだ。かちゃり、という心地いい音がした。そしてこの前と同じようにドアを開いたら、扉からあふれる光が智也を包んだ。
　少し目がくらむー。最初はただこの前と同じように光で何も見えなかった。だがそれも一瞬で

あり、徐々に視界に色を取り戻していく。上にはいっぱい青と少しの白い雲、眼下にはコンクリートの無機質な灰色が広がっていた。
　その奥の中心に、彼はいたー。
「やぁ。成瀬君。また来てくれたね。」
　一之瀬は振り向いた。少し吹いている風がサラサラと僕らの髪を撫でていく。
「うん。また来たよ」
　我ながら変なあいさつで少しおかしかった。一之瀬の所に近づいて行く。風が気持ちいい。先ほどまでいた教室や、廊下とは違いここでは精神が解き放たれるような気持がした。一之瀬の隣に立ち、空気を大きく吸い込み、吐いた。フェンス越しの景色を眺める。体の中にある毒素が排出されるようであった。
「一之瀬はだいたいいつ頃にここに来るの？」
　智也が質問する。
「いつ？うーん、あまり考えたことないな。行きたいと思った時に来る。」
「ちなみに今日は？」
「今日は昼休みぐらいからかな。午後の授業に出るのが嫌だった。」
　智也は吹き出した。
「なんだ、それ。まるで不良じゃないか。」
　一之瀬はぽかんとしていた。目にかかりそうな髪が風で揺れている。風景と見事に合い、一枚の絵のようだ。
「不良？よく分からないな。」
　ほんとに分からなく困惑しているようだった。そんな一之瀬の姿がなんだか面白く、智也はこみあげてくる笑いを抑える努力をしなければならなくなった。そんな中、智也に一つの疑問に思った。
「ごめん、ごめん。気にしないで。でも一之瀬は一学期の頃からよく早退していたけど、もしかしてずっとここにいたりしたの？」
　そう聞くと一之瀬は少し困ったような顔をした。
　少しの間、微妙な沈黙が流れた。そんな一之瀬の様子を見て、智也は一つの考えがぼんやりと思い浮かんだ。自分は一之瀬の触れられたくないところに安易に触れてしまったのだろうかー。
　例えば一之瀬が重たい病気なんかを患っていたら、それは一之瀬にとっては気軽に話せる話ではないはずだ。あくまでもそれはたとえ話だが、もしかしたら一之瀬自身聞かれたくないことだったかもしれない。智也はそんなふうに考えた。そして戸惑いを感じ始めた時、そっと一之瀬が口を開き始めた。
「そうだね。一学期の頃はね、授業を抜け出してここには何度か来たことがあるよ。でもここに来るよりも、家にいた方が多かったかな。」
　一之瀬は少し遠い空を眺めながらいった。ここではないどこかを見ている眼。気が付いたら消えてしまいそうな感じだった。一之瀬の一瞬見せるこの雰囲気は、空という風景と溶け合っていた。河原の時と同じ雰囲気を智也は感じた。

「成瀬君。」
　ふと、一之瀬が自分の名を呼んだ。反射的―だが、ゆっくりと智也は一之瀬の方に目を向けた。
「君は、生きていて息苦しさを感じないかい？」
　さっきまでとは違う、心の中を見透かされるような澄んだ瞳が智也に向けられていた。智也はどきりとした。直観的なものであるが、一之瀬のその眼は屋上に案内された時や、さっき会話していた突起のような楽しげなものではなかった。もしかしたらこれが一之瀬の本質なのかもしれない。例えるなら懺悔室で罪のすべてを告白しなければならないかのような雰囲気を醸し出していた。
　智也は息をすることも忘れてしまうくらいに、一之瀬の瞳と言葉に惹きつけられていたのかもしれない。すぐには返答できなかった。
　それは頭には言葉が思い浮かばなかった。
　しかし心では吐き出したいものがあった。それらは今まで智也が心にため込んできて来たものなのかもしれなかった。その鬱憤の正体は智也自身にも理解することができない。ただもやもやと胸の中にあり、時々それが大きくなったり、小さくなったりしていた。それは自然と、ゆっくりと智也の口から出てきた。いや吐き出していた―。
「そうだね……。そんな風に感じることは何度かあるよ。」
　智也は空ではなく下のコンクリートに目をおろし、呟き始めた。
「なんていうかな……。みんな、その教員とか、家族とか、クラスとか、僕の場合予備校とかそういうの、時々何もかも面倒に感じることがあるよ。いや、時々ではないな…。この頃はしょっちゅうだ。みんな、うるさいんだよ―。」
　いろいろなことが智也の頭の中を巡っていた。教員に言われる余計なこと。自分の思っていることも勝手に決め、勝手に期待してくる家族、その他の人間関係。毒素を吐き出すかのように智也はどんどん言葉を吐き出していく。フェンスを握る力が強まる。
「僕はやることは一応きちんとやっている。でも、みんなは上を目指せ、上を目指せって念仏のように唱えてくる。それは確かにいいことだと思うよ。社会や世間体的にはね。僕もそれなりに期待には応えてきているはずだ。ずっと、ずっとそうしてきた。」
　言葉が自然に紡がれていく。いつもの智也とは違って、饒舌に―。智也自身も驚いていた。だが、言葉は続く。知らない自分が喋っているように感じられた。
「それなのに、まだ言ってくる。本当に思っていることなのかどうか疑わしくなってくる。まるで見えない言葉、いや価値観か概念みたいなものの壁が僕の周りにあって圧迫しているような感じだ。そんな圧迫を感じると無性にイライラする。時間がたてばそんなこともなくなるけど、それでも壁は消えてはくれない。最近はイライラする頻度がおおいかも。イライラするだけならまだしも気分が落ち込むこともあるからね。そうなったら最悪だ。教室でもそうだよ。特に興味もない話をいやというほど聞かされて、周りに同意しなくてはいけない雰囲気があるんだ。そうだ、これはおかしい。脅迫されているかのような、そんな感じがあった。そういうのはひどく疲れる。だからクラスとかにもあまりいたいとは思えない。息苦しい―。確かにひどく息苦

しい……。」
　智也は吐きそうになった。自分がこんな発言をするなんて思えなかった。だがこれは嘘偽りのない自分の本心だということが確信できた。この前予備校の講師の面談の不快感。そういったことは前からよくあった。
　こんなことを胸にため込んでいたのか―。
　自分でもきちんと認識できていなかった気持ちだった。気分が悪くなる。智也は口に手を当てた。本当に嘔吐しそうなわけではない。ただ口をふさぎたくなった。衝動的な行為であった。これ以上吐き出さないように―。
　けど―。
そんなことをする必要がどこにあるのだろうか。

　一之瀬の瞳は変わらない。ただ風の音だけがほんの少しだけ聞こえる。それが今の二人が感じられるすべてであるように感じられた。
　すこし間を置き、口を開いたのは一之瀬であった。
「そうか。それはとてもつらいことだよね。うん……、分かるよ。僕もね、君と似たようなことを感じたことがある。」
　智也はゆっくりと視線を一之瀬に向けた。少し驚いていた。一之瀬が自分の支離滅裂な言葉に共感を示していたからだ。だがその一之瀬はどこか虚ろな表情をしていた。
「……一之瀬も？」
　智也が低い声で呟いた。
「うん。だから学校に来るのが嫌だった。―でもこの屋上やあの河原を見つけた。」
　突然風が強くなった。智也はとっさに腕で風を遮った。一之瀬はその風を全身で受け止めていた。一之瀬は風の中語り続けた。
「この空やあの河原の風景は、透き通っていた。僕を苦しめるものは何もなかった。学校や家は本当に気持ち悪かった。みんな同じことを言うからね。ほんとに煩わしい日々だった。周りが人のカタチをなした悪魔か何かに思えたよ。」
　一之瀬はそう吐き捨てた。普段からは考えられない態度だった。だが智也は妙な共感を確かに得ていた。
「一時的にとはいえ解放された。ここや河原だけが僕の心の居場所であるように思えた。成瀬君も似たようなことを感じたのだと思うけど、どうだい？」
　いたずらっ子のように一之瀬は微笑んでいる。
　―そうか。そういうことだったのか。
　智也は自分が時折感じている粘ついた不快感と、河原での気持ち良さの本質の輪郭を初めて意識できた。僕は周りが煩わしく感じていたのだ。決まったことを当然のように言う大人、それがいつしか不快な雑音にしか聞こえなくなった。クラスでも同じことだ。不快な音でしかない。そしてここや河原はそんなものとは無縁の聖域だった。何も智也の心に鑑賞してくる存在はそこにはいなかった。智也は空を見上げた。風が吹いている―。

　そして目の前には一面の青。美しかった。この風も合わせた風景が何よりも貴く感じられた。
「そうか。僕は雑音のない静かな居場所を求めていたのか。」
　心が軽くなっていた。さっきまで感じでいた吐き気ももう嘘のようになくなり、すっきりしていた。風がいつもより心地よく感じる。
「ありがとう、一之瀬。やっと解放されたような気がする。」
　きっとまだいたずらっ子のように微笑んでいるのだろう。智也はそう思ってもう一度一之瀬に目を向けた。だが一之瀬は先ほどまでとは違い、冷たい表情をしていた。
「でも、成瀬君。壁は取り払われたわけではないよ。」
風がまた強くなった。それはどうゆうことか智也は聞こうとした。だが、
「風が強くなってきたね。悪いね、僕はそろそろ帰るよ。」
いうが早く、一之瀬は背をむき扉と向かっていった。智也の胸にはすこしの不安が芽生えていた。だから少し遠くに行った一之瀬に聞こえるよう声を少し大きくして、問いかけた。
「さっきのどういう意味？」
　一之瀬が動きを止めゆっくりと振り返る。
「君なら、すぐにわかるさ。」
そういって、一之瀬は姿を消した。智也はその場で立ち尽くしていた。
　―どういうことだ？
　智也は一之瀬の言ったことを反芻した。だが、この時の智也にはまだ理解できなかった。呆然とする智也の上には変わらず青い空があった。風は前より少し冷たくなった気がした。

青い壁　十月一日

十月一日

　あれから三日たった。智也の日常は少し変わってしまった。周りが変わったわけではない。智也の周りの見方―。いや、感じ方が変化してしまった。それは時折沸き起こる不快感の連続であった。学校でも家でも予備校でも同じ不快感を抱いた。おまけにその不快感自体も肥大化していた。ひどいときは吐きそうになる時もあった。最初はただの体調不良かと智也は思っていた。だが、それは河原にいったら解消された。だが、翌日学校に行くとまた同じ不快感を抱いた。自分に起こったそれらのことを智也は最近になっておぼろげに理解し始めていた。単なる体調不良なんかではない。
「そういうことなのか……。」
　いつもより重たくなった頭を手で押さえ、教師の話を聞き流す。今の智也には教師の言葉など雑音にすぎなかった。教師の雑音が続く。ほとんど全てを聞き流していたが、ひとつだけなぜか耳に入ってきたことがあった。
「いいかー、この問題くらい軽くこなせないといい大学入れずに後悔するぞー。」
　―余計なお世話だ。と、智也は素直に思った。
　なぜだかは智也には分からなかったが、やけにこの言葉だけには敏感に反応してしまった。自分の心が淀んでいくのが知覚できる。少し気持ち悪くなってきた。
　―まただ、いけないな。
　智也は頭を振った。だがそれで淀みが消えるわけでもなかった。智也はただ早く時間が経ってくれることに期待するだけであった。
　長く感じられた三限目の授業終了の鐘がなった。智也は深い息を吐いて、椅子に寄りかかって足を投げ出した。智也の目に教師が立ち去る姿が目に入った。智也はだれも聞こえない小さな舌打ちをした。
「おーい、智也。」
　聞きなれた翔太の声が聞こえてきた。いつもならなんとも思わないで反応したが、今は少しこの能天気な声に智也は煩わしさを感じた。
「……何？」
　軽く顔を翔太に向け、いつもよりそっけない態度で反応する。見慣れた能天気な顔があった。
「ここ最近どうしたの？なんかずっと不機嫌だけど、病気か何か？」
　智也は少し考えて返答した。
「いや、ここ最近ちょっと体調が優れないだけだよ。急に涼しくなってきたからかな。それと昨日は寝不足だ。」
　寝不足は嘘だった。
「寝不足って何してたの？」
「えーと、最近買った本が面白くてね、つい夜更かししちゃったよ。」

　これも嘘だった。とりあえず智也は今一人にしてほしかった。
「だからこの時間で少し寝たい。言っている意味わかる？」
「あー、鬱陶しいから話しかけんなってことね。可愛げないなお前は、人がせっかく心配してやったのに。はいはい、お望みどおりに消えますよ。」
　相変わらずよくしゃべる奴だった。でも今はほんとに鬱陶しく感じた。適当に返事を返して智也は机に突っ伏した。目を閉じて思う。次の四限目は三限目以上に憂鬱になるであろうということ、そして何よりも今強い願望のこと。それは、屋上に行くことであった。

　息苦しく感じた四限目も終わり、智也は一目散に教室を出て屋上に向かった。息苦しさは続いていた。屋上へ続くドアを目指していく。以前は周りの目も多少は気にかけていたが、今の智也にはそんな余裕はなかった。そして階段を上り、屋上の扉の前にたどり着いた。ポケットから鍵を取り出す。いつもよりも落ち着きがなかった。あわただしい手つきで鍵を差し込み、ドアノブを回す。智也の目の前に空が広がった。
　扉を開けた時智也の体に纏わりついていた汗がスーッと引くような心地がした。毒の霧の中を抜け出してきたかのようであった。新鮮な空気を大きく吸い込み、吐き出した。この頃は夏の暑さも引いてきており、過ごしやすい季節に移り変わっていた。少しだけ吹く風が一段と心地よく感じられる。少し落ち着いたところで、智也は周りを見渡した。一之瀬の姿は見えなかった。一之瀬がどこにいるかなんて智也には想像もつかなかった。
　屋上の真ん中に足を運び、智也は寝ころんだ。智也の目にはのんびりと動いている雲が映った。気持ちが段々と軽くなってくる。少しぼーっとしてから智也は考えた。
―どうすればいいのだろう。
　―六日前。
　一之瀬とこの場で交わした事。一之瀬によって浮き彫りにされた智也の胸中。自分でもわかっていなかった心情がたったあれだけで暴かれてしまった。それは智也にとっては不快なことではなかった。その時はむしろ胸の棘がとれたような気がして、すっきりしていたものであった。
だが、その翌日から異変は現れた。
　初めは学校であった。いつも通りに通学していた智也だったが、どこかいつもと違う感じがした。虫の知らせというものだろうかと最初は思っていた。
　だが、そういう不吉なものといったものではなかった。この智也もそういう日もあるだろうと、特に気に掛けることもなかった。朝にあった翔太が少しうるさく感じたぐらいである。
　異変は教室に入っていたからであった。いつものように聞こえてくる、クラスの話し声。なんも変哲もないはずのこの声が智也はひどく気持ちが悪いようなものに感じられた。風邪でも引いたのだろうかと思った。引き返すわけにもいかず、自分の机に向かった。その足取りはひどく重たく感じられた。
　席についても気持ち悪さは続いていた。保健室に行って休むことも考えたが、それほどのことでもないと智也はこの時は思ったので担任が来るまで机に突っ伏し、休むことにした。
　それから気持ち悪さは少し安らいでいたので智也はいつも通りに授業を受けることにした。

だが、その日の授業を終えた智也はげっそりとしていた。智也はその日はすぐ家に帰ってすぐに眠った。
翌日は土曜日だったので念のために横になっていた。
そうすると次の日にはほとんど体調が元に戻っていたので、すこしだけ予備校のテキストの復習をした。念のためその日も早めに寝ることにした。
それでも翌日教室に入ったら、この前と同じ不快感が蘇った。どうしたのだろうか。
その日、智也はこの原因について一日中考えることにした。気をまぎわらしたかったこともあった。風邪とかではないのかもしれない。そう智也は思い至った。なら精神的な事であろうか。そんなふうに考えていったが、その日は智也には回答を出せなかった。そうして学校での一日が終わっていた。
その日は予備校があった。模試が近いということで、智也は自分の体に鞭打って予備校へ行った。
だが、智也はすぐに後悔することになった。学校よりも気分が悪くなった。授業中に講師にも心配されたが、智也にはそれすら鬱陶しく感じた。拷問のような時間だった。早く帰って寝ようとこの時は思っていたが、ふとある考えが智也の頭を過った。
―河原に行ってみよう。
そう思ったが早く、智也は何かに誘われるように河原へと向かった。徐々に河原にチ被くにつれ智也の足は速くなっていた。まるで砂漠で水を手元に持っていいない人間が、オアシスを見つけたかのような足取りであった。そして智也は河原にたどり着いた。
圧倒的な解放感がそこにはあった。長い人込みの中をようやく抜け出したような、あるいはようやく汚い空気の中から抜け出し、新鮮な空気の中に出たような感じであった。
智也は河原の空気を大きく吸い込み、今までたまっていたものを吐き出すように呼吸した。その行為を何回か繰り返す。心なしか、智也は気分が少し良くなったように感じられた。
そしてゆっくりと腰を下ろした。しばらく川の方を智也は眺めた。水流の音が心地よく智也の耳に入ってきた。そうしてふと智也の頭に一之瀬の言葉が思い浮かんだ。
「―壁は取り払われたわけではないよ。」
智也は反芻する。あれは今の僕の状態と何か関係があるのだろうか―。
なんなく今の自分の状態が風とかではないことが智也は察しがついていた。しかしなぜこんな風になってしまったのかは今まで見当もつかなかったが、今やっと現状の手掛かりになりそうなものに智也は思い至った。
―もしかして今まで感じていた気持ち悪さを前よりも感じやすくなっている？
馬鹿馬鹿しいことだと以前の智也はそう思ったであろう。だが、今は違っていた。そう考えると妙に納得してしまう。だがなぜなのであろう？そうしてさらに考えていくと一つの可能性に智也は至る。
―この気持ち悪さは消えてくれないのではないか？
智也は頭の中で思ったことをふるい落とすように、頭を振った。そんなことは有り得ない。結局智也は一之瀬が不思議なことをいうものだから、少し彼の影響を受けておかしくなっているの

かもしれないと思うことにした。そのせいで精神的に少しおかしくなっているとこの時は結論づけた。そして智也は今後なるべくこのことを考えないようにしようと決心した。

そして十月一日、今に至る―。
気がついたら四限の授業の終了を知らせるチャイムが聞こえた。ほとんどぼーっとしていたようであった。智也はまるで寝起きのような状態で席を立った。そして教室を後にした。
まずは購買のパンを買いに行った。いち早く来たおかげかまだ購買は生徒の姿でごった返していなかった。パンを買ったら智也は屋上に向かった。最近では屋上に行くことが習慣化しつつあった。
屋上にたどり着いた。鍵を使って扉を開ける。この扉を開ける瞬間が智也は好きだった。息苦しい空間から清浄な空間に変わるような気がするからだ。
智也の目に青い空が広がる。もうすっかり見慣れた景色なのだが、この心地よさは変わらずに智也の魂を癒してくれた。適当なところに腰をおろし、先ほど購買で勝ったパンの封を開け、かじりついた。味は何の変哲もなく、コンビニでも売っているようなごく普通のツナサンドなのだが、ここで食べると心なしか少しだけいつもよりも美味しく感じられた。一之瀬はいなかった。最近は教室でも放課後にも姿を見かけなかった。不思議と心配にはならなかった。そのうちまた顔を出すだろうと、何となく智也は思っていた。
それよりも智也は自分の今の状態についてのほうが遥かに深刻だった。
―あれから色々なことが智也には解ったような気がした。
―壁。
智也をとりまく不快な壁。今まで何度か感じて不快になった時は少なくなった。一之瀬にこのことを吐き出したときは本当にすっきりしていた。その時は新しく生まれ変わったような心地さえした。だが、それは間違いであったことに智也は気づいた。
「―消えてくれるわけじゃないんだね。色々と。」
そう。消えたわけではなかった。壁は依然として智也を取り囲んでいた。今まではその存在すら気が付かなかったが。一之瀬とのやり取りの後、その壁はしっかりと認識でき、感じられ、捉えられるように智也はなってしまったのだ。
―智也は醜悪な壁が今までより強く感じられるようになってしまった。
そのことに気が付いた昨日、智也は学校のトイレで本当に胃の中のものを吐き出してしまった。幸い昼飯を食べる前の昼休みだったので、周りにはばれずに済んだ。だがもう教室にはいられなかった。
その時はすぐに屋上に行った。そんなこともあったので、屋上は智也にとって言葉通りの心のオアシスになっていた。
この屋上では一時的にその形無き壁の気持ち悪さから解放される。だがそれはあくまでも一時的である。河原もあるがあそこは予備校の近くにある。智也の家から予備校までは電車を使わなくてはいけないのである。予備校の帰り道ぐらいしか行く暇がなかった。その点、屋上は一之瀬のおかげで気軽に足を運べる。今の智也にはとてもありがたいことだった。

穏やかな時間が過ぎていく。智也はこの場所を離れたくなかった。
―午後の授業さぼってしまおうか。
そこで智也はあることに気が付いた。
―もしかした一之瀬も同じことを感じ、あんなに学校に来ないのだろうか。
そうかんがえると妙に納得ができる。次に会った時に聞いてみようと智也は思った。
もう少しで昼休みが終わり、午後の授業が始まろうという時間に近づいてきた。智也は流れていく雲を惜しみながら体を起こした。
智也は今まで授業をさぼったことは一度もなかった。その真面目な行いの習慣が智也を教室へと誘った。少しふらつきながらも屋上の扉の前へ歩いた。そこから先はまた気持ち悪さがあふれている。憂鬱になりながらも扉を開け、教室へと智也は向かった。
この日は予備校もあり智也にとってはしんどい一日になった。予備校の帰りには河原に寄って少しは気分が和らいだが、明日も変わらなそうであった。今日の智也には夜空の星がいつもよりもきれいに見えた。

青い壁　十月二日

十月二日

　―放課後になった。
　智也は今日も屋上に足を運んだ。翔太から何か話しかけられたが、適当に打ち切って屋上へと向かった。もう慣れた手つきでドアノブに鍵を差し込み扉を開けた。そして青空の下に出る。とても落ち着いた。
　日の光でよく見えなかったが、目を凝らすと知っている人影があった。それはもちろん一之瀬の姿であった。
　智也はずいぶん久しぶりに一之瀬の姿を見た気がした。だがそんな感慨にふけることは智也にはなかった。むしろじらされている気分であった。なぜなら智也は一之瀬に聞きたいことがたくさんあったのである。それはもちろん智也が今まで以上に感じやすくなった不快感のことであった。
　「一之瀬―。」
　智也は声を上げると同時に、足早でフェンスの近くにいる一之瀬のもとに歩み寄った。ゆっくりと一之瀬が振り向く。一之瀬の顔が智也の視界に入ると、智也は息をのんだ。
　「なんだい。成瀬君。」
　その言葉に智也はすぐに反応することができなかった。なぜなら一之瀬の目の下にはひどいクマができており、細い体つきが一段と細くなっていた。みるからに一之瀬はやつれていたのである。
　「えっ、いやその…、ひ、久しぶりだね。」
　智也はうまく口が回らなかった。
　「そうだね。久しぶり。」
　智也は少しうろたえてしまった。聞きたいことがたくさんあったはずなのだが、一之瀬の明らかなやつれた姿をみると、何をしゃべったらいいのかわからなくなってしまった。すると先に口を開いたのは一之瀬の方だった。
　「どうだい。成瀬君。」
　智也ははっと顔を上げた。
　「最近気分が悪くなっているのだろう。」
　智也は唖然となった。自分が聞きたかったことを先に言われてしまい、またもやすぐに反応することができなかった。それに、一之瀬の目つきがいつもと違いい異様に鋭かった。智也はうろたえながら少し震えた声で言った。
　「全部……、わかってたの？」
　智也が聞くと一之瀬は病人の顔つきであったが、その口元を少し歪ませていた。
「うん。確実ではないけれど成瀬君は僕と少し似ているところがあるからね。予想はしていたよ。」

　智也は最初は一之瀬のやつれた姿を見て戸惑っていたが、今は何故だかは分からないが不気味なほど落ち着きを取り戻していた。
「なら、僕が抱いているこの不快感は、消えてくれないんだね？」
　智也は一之瀬をまっすぐに見つめながら言った。
「そうだ。僕らはね閉じこめられているんだよ。成瀬君―。」
「閉じこめられている？何に？」
　その時一之瀬の目つきがするどくなった。何かを憎んでいるような、怒りがこもっているような、そんな感情をあらわにしたかのような目つきに急変した。
「僕らにくだらない価値観や世界観や感覚を刷り込んだやつらだよ。成瀬君。」
　一之瀬の顔がひどく歪んでいた。その姿は、今までの一之瀬の神秘的な雰囲気は微塵も感じられなかった。その姿は物語の中でしか知らないような狂人のようなものだと他人事のように智也は思った。
「それはどういうことなんだい。一之瀬。」
　智也が尋ねる。
　一之瀬はゆっくりだが何かを込めるような口調で語り始めた。
「ずっと君も言われてきただろう。絵に描いたような優等生であり続けて、良い職業に就けだとか、立派な人間になれだとか、嫌になるほど周りから言われたくだらないこと。まだろくに熟していない子供の頃からね。そしてそれは子供が成長するにつれてより多くの人間に言われる。面白いことにみんなほとんど同じことを言う。言葉は変えているけど本質的には同じだね。」
　一之瀬は吐き捨てるように言い放った。その姿は今までの一之瀬の面影などほとんどなかった。
「僕も幼いころはそれらの言うことがすべてだと思っていた。しっかりと成績で優等生を示した。それが当然のことだと思っていた。それ以外のことなんて、何の価値もないと思っていた。少しの疑いもなく、ね。今思えば恐ろしいことだよ。」
　一之瀬の話を聞いて智也は一之瀬が毎回学年トップの秀才だったことを今更思い出した。一之瀬は智也が想像しているよりもずっと大変な教育を子供の時から受けていたのかもしれない―
　と、智也は思った。
　一之瀬の話は続く―。
「でも僕は段々とずれていった。なぜだかは分からないけど、今まで自分が信じ込まされたことに疑問を抱いたんだ。僕はなんで楽しくもないことをこんなにしているのだろう―ってね。そんな時に僕は今まで見もしなかった空や景色を見るようになったんだ。この空のような、きれいな空を、ね。」
　一之瀬は空を仰いだ。一之瀬の目はフェンス越しに遠い空を見つめている。その姿は何とも言えないほど儚げであった。
「そんな空や景色を見ているとね、くだらなく思うようになってしまったんだよ。あんまりにも奇麗で心地よくて安らいでね。でも―」
　「そう感じるようになってから、今までの日常が自地獄のように感じられた。」

一之瀬が智也に視線を向ける―。
「もう、わかるだろう？今の君と一緒だ。」
智也はどこか他人ごとのように一之瀬の話を聞いていた。なんとなくわかっていたのだ。一之瀬が自分と似たようなことを感じているということを。でなければこんなところにそう何度も足を運ぶはずがなかった。」
「そうか。やっぱりか。」
智也はため息をついた。
「ならー。」
そして智也が一番聞きたいことを言った。
「僕らはどうすればいいんだ？」
校庭から聞こえてくる運動部の掛け声がかすかに聞こえてくる。だがこの屋上の二人にはそんなものは全く意識の外にあった。風が少しだけ吹いている。
「ずっとこの不快感を抱いて生きていくしかないのかい。」
一之瀬はふっと笑った。
「そうだよ。もう長く壁にとらわれていた僕らはそこから完全に脱却することはできないんだ。何をしても何を見てもずっと憑いてまわる。まるで呪いのにね。気持ち悪いよね。だから僕は自分の部屋にこもって本を読んだり、ここに来たりしてなんとか気持ちをそらそうとした、でもそれもその場しのぎのようなものさ。」
一之瀬は無表情だった。濃い目のくまが痛々しく見える。今にも消えてしまいそうだった。
「ここはとてもいいところだよ―。なにせあるのは偽りのない空や風だけだ。毎日日が昇り沈んでいく―。風が心地いい―。それだけのことがすごく素晴らしくて、尊いものだと感じられる。僕が信じ込まされたものなんてなんとも無意味で醜いものだとわかる。ここには息がつまるような閉塞感なんてない。自由なんだよ―。でも、」
一之瀬は目を伏せる。
「ずっとここにはいられない。」
智也は言葉などはさめるはずがなかった。
「なくなってしまう―。だから、どこにいっても僕は自由に生きられない―。まるで死んでいるように生きるしかない。」
―虚無。今の一之瀬の姿は虚無という言葉がふさわしい。目が虚ろである。智也はだんだんと得体の知れない恐怖を感じてきた。
「ずっと考えていた。どうすればいいか―。そしてやっとひとつ見つけた―。」
一之瀬が笑った。その笑顔は初めて智也と話した時と同じように無邪気な笑顔であった。
「僕もあの空のもとにいければ素敵だなって―。」
智也の頭はもう一之瀬の言うことについていけなくなってきていた。
―だが、智也は一之瀬から眼を放すことはできなかった。吸い込まれていきそうな感じだ。智也は考えることすら億劫になっていた。ただ、一之瀬の声を聴くことだけはやめようとは思わなかった。

「だから行こうと思うんだ成瀬君。」
一之瀬はそう言って智也から眼をそらし、空に目を向けた。そして―、
一之瀬は屋上を囲うフェンスに足をかけ、よじ登り始めた―。
智也には一之瀬が何をしようとしているのかおぼろげに分かった。だが智也の口も体も決して動いてはくれなかった。
智也が何もせずに一之瀬を見ている間に、一之瀬はフェンスの一番上に足をかけた。
―あぁ、見上げると思っていたよりも高いな。
智也は間抜けなことを考えていた。なにも考えることができず、思考が麻痺していた。一之瀬はついにフェンスの一番上に立った。器用にバランスをとっていて、よろけるような様子はなかった。智也はただちょっと危ないかな、とだけ思った。
一之瀬が両手を広げていた。心なしかさっきよりも目がいきいきとしていた。それはまるで最初に智也が屋上に行き、一之瀬が見せた笑顔と同じような感じであった。
「やっぱり素晴らしいよ。この空を眺めていると、今まで信じていたものが全部くだらなく思えてくる。こんな素晴らしく、尊いものがあるのにどうしてあんなにみんなくだらないことばかりしているのだろう。それはひどく気持ちが悪いものなのに―」
智也は一之瀬をただ眺めていた。下から見上げる智也の視線上の一之瀬の姿は青い背景を後ろにしたこの場面がとても素晴らしいものに思えた。口なんて開こうなどとはもう微塵も思うことはなかった。
「もう僕はそんな中では生きられそうにない。だから行くんだ。」
そして今まで空を見ていた一之瀬は智也を見た。
向けられた瞳は怖いくらいにきれいで―澄んだ瞳をしていた。
「さようなら。成瀬君。僕はもう行くよ。君も早く解放されたらいいね。」
―そして、
一之瀬の体がフェンスの先にふわりと浮いた。
実際には人が落下するのにさして時間がかかるわけではないだろう。
智也には一連の出来事がスローモーションのように感じられた。
ゆっくりとだが確実に一之瀬の体は落下していった。

そんな中、一瞬だけ一之瀬の顔を智也は見た。
その表情はとてもこれから下に落下していく人間の表情とは思えなかった。まるで漫画の中で空を初めて飛んだかのような、嬉しさと感動が詰まったかのような表情であった。

そしてまぬけな音が下から聞こえた。
次に聞こえてくるのは人の悲鳴。
この声が智也には非常にうるさく感じられた。
「ここから離れないと……。」
智也の頭は妙に冴えていた。

ようやく動いた体に少し戸惑いながらも智也は屋上から出た。
近くで様々な声や音が聞こえてきた。音や男の怒鳴り声や甲高い女の叫び声。
―非常に不快だった。

智也は真っ直ぐに昇降口に向かい、靴を履きかえた。
周りから様々な不協和音が聞こえてくる。一刻も早くここから立ち去りたかった。
昇降口を出た智也は少し遠くに人だかりができているのが見えた。不協和音の元であった。
様々な人がいた。
口を押さえているもの。
泣いているもの。
恥知らずな野次馬。
そんな群像を横目に見ながら智也は学校を出る、正門へ向かった。
空が頭上高くに広がっている―。
それは智也らをいつも通りに覆い尽くしていた。

青い壁　十月九日

十月九日

　あれから事実上一週間がった。
　この一週間というのは智也には実際あまり関係がなかった。それは智也に立って時間の感覚が不明瞭となっていたからである。
　一之瀬が死んだ―。自殺である。
　彼のその瞬間を智也は見届けていた。あまりにも突然のことだった。その時は何も考えられず、ただ周りが煩わしく感じ、直接家に帰ってしまった。
　一之瀬が死んだという事実に智也は全く現実感を得られなかった。明日からまた同じように学校が始まるかのように感じられた。だが、その日の夜には学校から家に連絡がきて、学校は当分休校となることを担任の滝本から連絡があった。学校としては当然の対応であった。
　一之瀬の自殺の話はニュースにもなっていた。テレビの画面に自分が普段通っている建物が映っているというのは中々奇妙な感覚を覚えた。
　翔太からも携帯で連絡がきたが、話す気分ではなかったので適当な理由をでっち上げ打ち切った。智也は誰とも話したくなかった。
　今の智也にはやるべきことなど何もなかった。ただずっと布団の中にいて一之瀬のことについて考えていた。
　一之瀬のことを考え、眠たくなったら眠る。普段の智也からは考えられない自堕落な生活だった。
　父と母は智也のことを心配していた。智也は申し訳ない気持ちになっていた。だが、二言目には早く勉強の遅れを取り戻さなきゃね、なんとことも言っている。それだけが智也にとって不快で鬱陶しき感じることだった。居間に降りることも面倒なので智也は自分の部屋からほとんど出ようとせず、誰も部屋にはいれないようにしていた。
　そんな中で一つだけ智也にとって興味を惹かれる出来事があった。それは三日前に智也の家に担任の滝本が来たことであった。

　滝本が家に来たのは突然だった。母から滝本ができれば智也の部屋で智也と二人で話したいということを智也は聞いた。智也は不審に思ったが、一之瀬のことについていくつか誰かに聞きたいことがあったのでちょうどいいとその時は思った。智也の母は智也が一之瀬の自殺にショックを受けていると思っているので、智也の体調を気にかけていた。母は滝本に今日は帰ってもらおうかと智也に提案したが、智也は大丈夫だと母を納得させて、滝本を部屋に招きいれることにした。
　そして滝本が智也の家に上がりこみ、智也の部屋に二人で移動した。母が心配そうな目で智也を見ていたが、あまり気にしなきことにした。

滝本を部屋に招き入れ、手じかな座布団を二人分敷き、滝本と向かい合った。
最初は、「大変なことがあったなあ」と、滝本の気の抜けるような声から始まった。最初は現在の学校の状況のことの話を聞いた。当初はマスコミも押しかけ、関係者の連絡などに全職員が奔走し、かなり大変だったということであった。だが数日たつと徐々に騒ぎも収まっていき、学校ももう来週からは再開されるという話だった。
ここまでは滝本も気軽そうに話をしていたが、次の話から少しばかり滝本から緊張感が漂ってきた。
智也驚いたことは智也が一之瀬と一緒に屋上に何度かあっているということを知られているということであった。どうやら何人か立ち入り禁止の屋上に行く智也と一之瀬の姿を誰かに見られ、今回のことで滝本にも伝わったようであった。
そしてそのことで事情聴取ではないが詳しく話を聞きたいということであった。場合によっては校長とも面談してもらうかもしれないということであった。
誰がどう見ても孤立していると思われていた一之瀬と、智也は友好関係があったのかどうか、なぜ屋上に行っていたのか、一之瀬が飛び降りた時にはどこにいたかなどを細かく聞かれた。まるで刑事ドラマの取調室でのワンシーンのようだと智也は思った。
智也はごまかしてもいいことはないと思い、できるだけ正直に一之瀬のことについて滝本に語った。初めて一之瀬と会話した時のことや、屋上のことについてゆっくり時間をかけて滝本に話した。だが、一之瀬と話した内容のことについては何も言わなかった。それと、一之瀬の自殺時には家に帰っている途中だったと滝本に行った。もし自殺の場に居合わせたと言ったら、追及されて面倒くさいことになるのは明白だったからだ。
智也は一通り話し終えるとのどの渇きを強く感じた。それに久しぶりにこんなにしゃべったので少し疲れていたので、滝本に言い少し休憩をもらうことにした。
滝本は智也の話を聞いて困惑しているようだった。だがしばらくして何か納得したようなそぶりを見せていた。
少し時間を置いたら再び滝本が一之瀬のことを聞いてきた。
「一之瀬が自殺したことに何か思い当たる節はないか。」
この質問は智也がずっと考えていたことであった。そしてそのことを滝本に話す気は智也には毛頭なかった。
「いえ、わかりません。」
と、当たり障りのない返答をした。
滝本は困っているようで少し考え込んでいるように見えた。そして少しため息を吐いた。
「わかった。よく話してくれた。お前が一之瀬と交流があったのは分かったが、今回のことには直接原因にかかわっているわけでもないから、屋上に行っていたことは今後何も問わないことにする。校長室に行くこともない。ただ、また何かあったら話をさせてもらうことがあるかもしれないということだけ気に留めておいてくれ。あとは……、もう屋上には絶対にいかないこと。」
滝本は釘を刺すように言った。
「すいません。もう屋上には行きません。」

智也は務めて冷静に滝本に謝罪した。
「後は……、お前から聞いておきたいことは何かあるか？」
智也は少し考えるそぶりをして滝本に聞いた。
「あの……、一之瀬はどんな奴だったんですか。」
滝本は少し怪訝な顔をした。
「どうとは？」
「その……、学年トップだったし、学校はよく休んでいるから、気になって……。そんな話とか聞いたことなかったので……。」
歯切れの悪い言い方であった。滝本は少し唸っていた。
「うーん。まぁいいか……。」
滝本は頭をぼりぼりと掻きながら話し始めた。
「お前も知っている通り一之瀬はちょっと……、いや、かなり変わったやつだということは分かっていると思う。成績はいつもトップなくせして、学校にはなかなか来ないし、クラスでも浮いていたよな。」
智也は少し滝本の言い方に引っかかるところがあったが、話の腰を折るのも何なのでとりあえず首を縦に振った。
「詳しくは話せないが一之瀬はかなりいいところ出の子供だ。」
智也は黙って滝本の話を聞いていた。
「その家では特に教育に力を入れていて、本来なら一之瀬は日本のトップの進学校に通う予定だったという話だ。全国模試でもトップレベルだったらしい。だがちょっと不都合があったらしく進学校には行かずにここに来たわけだ。俺もその辺の正確な理由は俺も良よく知らないがな。」
滝本はふうっと、息をついて話し続けた。
「そんな優等生だったんだが、ふとご両親から校長に話があった。それが面食らう話だった。なんでもうちの息子は他の子とは違うから息子の態度は目をつぶってほしいという話だったそうだ。具体的には学校をさぼることだな。おまけに代価として補助金まででしてきやがった。うちも私立で経営が楽というわけではないし、全国トップレベルの優等生だから断るに断れなかったそうだ。」
智也は驚いていた。一之瀬が成績トップだということは知っていたが、ここまでだとは思っていなかった。
「俺も担任を任せられたときは不思議に思ったが、ふたを開ければこうというわけさ。当時は校長から口酸っぱく言われたよ。そして今回のことだ。もうずっと校長やご両親の罵詈雑言と責任追及だ。なんとかクビにはならなかったがな。」
滝本がため息をついた。次の言葉が見つからず微妙な時間が少し流れた。
「まあ、一之瀬のことについてはこんなところだ。これ以上は勘弁だ。なんかお前の方で思い当たるところはあるか？」
智也は少し考えてから言った。
「そういったことがあるから一之瀬の……、自殺の原因を探っているんですか。」

滝本はバツが悪そうにまた頭を掻いた。
「まあ、そういう側面もあるな。一応言っとくけど他の奴には俺と話したことは誰にも言わないようにな。」
それは言うのが遅いだろうと智也は思ったが、あまり関係ないことなので気にしないことにした。
「僕には……、一之瀬が死んだ理由が思いつきません。そもそもそんなに仲が良いわけでもありませし、話したきっかけも偶然でした。でも―、」
「先生は、どう思っているんですか。」
滝本は頭を掻くのをピタリとやめた。そしてゆっくり言った。
「それは俺には分かるはずがないよ。ただ―、」
滝本は少し目をそらし続けた。
「自殺した前日は、両親とかなり揉めたらしい。」
智也は少し目を伏せた。
「そうですか……。変なこと聞いてすいません。」
智也はぺこりと頭を下げた。
「いや、気にするな。そうだな……、それじゃそろそろお暇させてもらうよ。長々とすまなかったな。」
滝本は立ち上がりながらそう言った。智也もつられて立ち上がった。
「いえ、屋上のことは本当にすいませんでした。」
智也はもう一度頭を下げた。
「おう。とりあえずあまり気に病むなよ。不幸な出来事だったんだ。それと親御さんにあんま心配かけないようにな。」
滝本は背を向けながら、手を振った。そのまま玄関まで見送くると、滝本は帰っていった。」

それが三日前の話だった。
滝本が言っていたように明日から学校が再開される。
智也は相変わらず、一之瀬が自殺したことについて考えていた。
誰とも口をきこうとしなかった一之瀬と会話が成功して半年もたっていなかった。よく考えたら滝本の言っていることと、これまで一之瀬と会話していたことしか智也は一之瀬について何も知らないのだった。急に一之瀬との距離がはるか遠くになってしまったように智也は感じた。実際一之瀬は遠くの所に行ってしまったのだが。
「……。」
一之瀬はもうこんな所では生きてはいけないと最後に言っていた。こんな所とはおそらくこの世界のことであり、それは智也が感じていたものとほとんど同じもとと言っていいだろう。
智也が感じていたことを一之瀬は智也よりもずっと前に感じていた。滝本の話で一之瀬はずっと厳しい教育を受けていたのだろう。何せ全国トップレベルのことだ、生半可ではなかったは

ずだ。恐らくその厳しい両親から自分よりもよっぽど口うるさく、厳しく言われていたのだろう。
　―そんな中で、彼はあの屋上、空を見つけた。
　心が洗われるような感覚だったのだろう。その時の快感は智也も知っている。
　―だがそのあとは地獄だったはずだ。
　あの周りの気持ち悪さは忘れられなかった。今は一人でいる時間が長かったおかげか、あまり不快感を抱いていなかった。もっとも消えたわけではないが。
　あの感覚を一之瀬はどう感じていたんだろう。
　その感覚をどうやって付き合っていたのだろうか。
　そして一之瀬は空に行くと言っていた。
　「どうゆうことなんだよ……。」
　智也には分からなかった。
　「ふぅ……。」
　智也は布団の上で寝返りを打った。もう何度同じようなことを考えたのだろうか。気が付けばもう日付を跨ぐ時間に差し掛かっていた。
　明日は久々の学校である。正直登校する気力など智也にはからきしなかったが、滝本のこともあるので、登校しないわけにもいかない。おまけにずっと気分が悪かった。
　「もういい、寝てしまおう……。」
　智也は部屋の電気を消して布団の中に潜り込んだ。少しばかり暑苦しさを感じた。
　なかなか寝付けなかったが、時間が過ぎるにつれ微睡の中に智也は沈んでいった。
　完全に闇に沈んでしまう前に智也は一之瀬の後ろ姿を見たような気がした。
　一之瀬の顔が半分だけ見える―。
　夢だということは眠気で虚ろな智也でもわかっていた。だがその姿は克明に映っていた。
　一之瀬が少し微笑んだようだった。そして囁いた―。
　「成瀬君も早く解放されたらいいね―。」
　闇が一之瀬を塗りつぶしていく―。
　いや―、それは闇ではなかった。
　それは―、「青」だった。
　智也は手を伸ばそうとする。
　何かに引っ張られるような感覚―。
　伸ばした手は虚しく、「青」の前で漂う―。
　智也の体が何かに覆われていく。それはひどく気持ち悪い気がした―。
　そうして智也の意識は沈んでいった―。

青い壁　十月十日

十月十日

　今朝はどんよりとした気分で目覚めた。夢の中にいるような心地であった。朝食はトーストを牛乳で無理やり胃に流し込み、気怠い体を引きずるようにして家を出た。智也自身何故こんなにも気分が悪いのかわからなかった。頭の中に霧がかかっているような心地であった。
　家から出ると太陽の日差しが智也を出迎えた。久々に太陽の日差しを浴びたので、おもわず目をしかめてしまった。空は多少雲があるが、今日も奇麗であった。ただ、今日の空は屋上で見た時よりもずっと遠くに感じられた。
　バスに乗った後は景色をぼーっと眺めていた。夏の時とは違い冷房ももう切れている。制服も衣替えした。過ごしやすい季節にはなっているが智也にはまるで関係なかった。
　バスが止まり、智也はのそのそとバスを降りた。学校に歩いていく生徒が見えた。
　その光景を見て智也は思った。
　―何かが違う。
　その何かは智也には分からないが、智也はそう思った。今まで感じていた不快感と少し違うような気がした。だが何はともあれ学校に行かなければならなかったので智也は無理やり体を動かし始めた。
　歩くたび、ほかの生徒を見るたびに智也は気分が悪くなるような気がしてならなかった。歩いている生徒たちの声が非常に不快だった。何を話しているか何となく想像がついたがそんなことは智也にとってどうでもよいことだった。とにかく周りの声が不快だった。意味もなく、くだらないことをずっと、際限なくしゃべり続けているものがひどく不快で気持ち悪く感じた。
　今までうつむいたまま歩いていた智也だったが、ふとその不快な声を発するものに目を向けてみた。瞳に映ったその姿は智也にとって非常に気持ちの悪いものと映っていた。
　―なんなんだよこいつら……。
　みんな同じような顔に見えた。しゃべっていることも同じような感じだった。仮面をかぶって話しているみたいだった。無論そんなことはないが、今の智也にはそう感じていた。
　智也は気分が一層ひどくなった。胃が逆流するようで、耐えきれなくなった。
　智也は駆け出した。驚いた生徒が何人かいて智也の方を見たが、智也はそんなことを気にしていられなかった。
　靴を履きかえすぐに近場のトイレに駆け込んだ。
　「うっ、おぇっ……。」
　今日はいつもよりひどかった。胸の中の不快感を吐き出すようだった。しばらく水道にへばりついて、水を飲んだ。
　ひとしきり収まったところで、智也はおぼろげな心地で呟いた。
　「なんだよ、これ……。」
　こんなことは今までになかった。一之瀬の話を聞いた後も確かに慢性的に吐き気があったがこん

なにもひどいことはなかった。すぐには教室に行けそうはなかった。少し怖かった。
　しばらくトイレで気分を落ち着け、ようやく智也は教室に向かった。廊下にでたが、もう少しでチャイムが鳴るのにあたりは騒がしかった。一之瀬のことについて皆騒いでいるのだった。
　少し前までは自分もあのいくつもある集団のどれかに属して、翔太とかも一緒に話していたのだろうか。そうぼんやり考えると智也はまたひどく気分が悪くなるようだった。
　なるべく意識しないように、雑音の波をかき分けながら智也は自分の教室に向かった。
　教室の前に立った。
　いつもは気にせず開けている何の変哲もない扉なはずであるが、今の智也には異様なものとして目の前にそびえたっているように見えた。
　扉の前でただ突っ立っているわけにもいかないので智也は仕方なく扉を開けた。
　扉を開けると雑音が一層大きくなった。智也はそれに少したじろいだ。次の瞬間にはその雑音を発しているいくつかのものの顔が智也に向けられた。智也は込み上げる吐き気を押えながら、教室に入った。
　不快な声がいくつも聞こえる中智也はまっすぐに自分の机に向かい、腰を下ろした。そうすると何人かが智也の周りに群がってきた。
　声を掛けられる。いつものあいさつなどはせず、一之瀬の話をしたいようだった。智也を取り巻くのは翔太の友達だった。翔太との繋がりで彼らとは智也も少し話すほどの中だった。名前は何故だか思い出せなかった。
　「成瀬、聞いたか？あの一之瀬の話。すごい騒ぎになってたぜ。」
　「俺なんか現場の近くにいたぜ。」
　「不謹慎だけど学校休めてラッキーだったよな。」
　次から次へと話しかけられる。智也は心底不快に感じた。不快だけならまだよかったのだが彼らの顔を見るとまた吐き気が込み上げてきた。
　ほんとになんなんだろうこいつらは―。
　さっきから同じような事しか言わないで、オウムのように頷き合っている。こんなものを智也は何度も見てきた。時には自分もその中にいた。今の智也にはそれがはっきりと気持ち悪いものに感じられる。
　お前らなんかが一之瀬のことを話すな―。
　やがて智也は彼らの顔がだんだん同じに見えてきた。その顔には何もないように見えた。まるでのっぺらぼうのようである。智也にとって彼らはひどく醜悪で、くだらないものに思えてきた。とにかく気持ち悪かった。やがて智也はついに耐えきれなくなり立ち上がって言った。これ以上この場にいたくなかった。
　「ごめん。少し気分が悪いんだ、保健室に行ってくる。先生に言っといてくれるかな。」
　智也の態度に彼らはすぐに反応できなかった。
　「あ、あぁ……。そうか。すまん……。」
　彼らは一歩引いた。智也は少し早めの歩調で教室を出ていった。廊下の途中で翔太と鉢合わせたが、目を少し合わせただけで、挨拶もせずに通り過ぎてしまった。

翔太は智也に声を掛けようとしたのだがそれより先に智也は行ってしまった。

　保健室にはいかなかった。呼吸も乱れていたので少しトイレで気分を落ち着けてから、智也はあの屋上に向かった。落ち着けるところはそこしかないと智也は思った。
　向かう足が自然と早くなっていた。鼓動が高鳴る中智也は屋上を目指した。
　智也が見たのは無粋な文字で立ち入り禁止と書かれた看板と、屋上への階段を遮る無粋なビニールテープだった。
　智也は少しためらったが、あたりに誰もいないことを確認すると、張り巡らされているビニールテープの下をくぐり屋上へ向かった。
　扉の前に立つ。もう何度目になるのか智也は忘れてしまったが、今日ほどあの空を渇望したのは初めてだった。
　汗がにじむ手をポケットに突っ込み、もう使い慣れた屋上の鍵を焦りながら取り出す。少し手が震えていたが、鍵をしっかりと持ち、ドアノブに突き刺し、鍵を回した。だが、いつものようにかちゃっ、という心地いい音はなく、鍵が回らず、金属が何かに引っかかっているような無骨な音が聞こえた。無論扉は開かない。
　「あ、あれ……。おかしいな……。」
　智也は慣れた行為を何度も繰り返した。だが鍵は回らず扉は閉じたままだった。智也は焦り、次第には冷静ではなくなっていった。
　「くそっ……。なんなんだよ、これっ。」
　違うやり方も何度か試したが、扉は開かなかった。おそらく学校側が一之瀬のことをきっかけに鍵を変えたか、扉そのものを永久に閉じてしまったのだろう。考えてみればひどく論理的で筋が通っている。
　途方に暮れた智也はしばらく扉を背にし、座り込んで途方に暮れていた。
　「もうここには行けない……。あの景色を見ることはできないのか……。」
　智也はひどく落ち込んだ。すぐには立ち上がれそうになかった、体がひどく重たく感じられた。今頃学校の連中は体育館で一之瀬のことを聞いているのだろう。本当なら智也も体育館にいなければいけないのだが、そんなことはどうでもよかった。
　学校の連中がみんな体育館にいるのならここにはまだ誰も来ないだろう。智也はそう思い、もう少しここにいることにした。そして今までのこと考えた。ここは自分の部屋よりも落ち着いて考えられそうだった。
　考えてみればどうしてこんなことになってしまったのだろうか。
　一之瀬が自殺したなんていまだに智也には信じられなかった。あの時一之瀬はちょっとどこかに出かけるかのように屋上から飛び降りた。
　自分と一之瀬はこれまで同じような思いを抱いていたのだろう。智也はそれを一之瀬気づかされた。
　それとは「壁」のことである。
　その「壁」は智也にとってひどく不快なもので、前々から感じていたことだった。いつから感じ

始めたなんてことは分からない。
　閉塞感というのだろうか。毎日周囲の期待に応える日々にストレスを感じていたのだろうか。一之瀬は自分よりもそのストレスを感じていたのだろうか。滝本の話だと相当厳しい家だそうだ。プレッシャーなんてものもあっただろう。そして恐らくそのプレッシャー、「壁」は消えてくれることなんてなかった。恐らく一之瀬は自分よりももうずっと長く感じていたのだろう。
　智也は考えが先週の家にこもっていた時とは違いクリアに考えられるようになっていた。家では考えてももやもやして結局は眠りについてしまうことがほとんどであった。なぜなのだろうか。ここがあの空に近いところなのだからかもしれないと、智也は思った。まだ時間はある。もう少しだけ考えることにした。
　「壁」のことに一之瀬に気付かされたあとは、周りのことがひどく気持ちの悪いものに思えた。この気持ち悪さは言葉では語りつくせない。人も物も何もかも歪んで見えた。今朝は特にひどかった。
　何よりも恐ろしく、不快なことは自分もその気持ちの悪いもののまっただ中に居ることだ。そしてその中に居ると自分の中に気持ちの悪いものが入って、自分が犯されていくかのように感じられるのだ。それが、今までは我慢できたが今朝はもう耐えきれなかった。
　「僕はおかしくなってしまったのかな……。」
　智也は自分の膝を抱え込んで頭をうずめた。そして自分の制服を強く握りしめた。
　「これからどうしようか……。」
　智也はまた考えた。とりあえず学校にはもう居たくはなかった。またあの中に行くことは想像もしたくなかった。少し前までは当たり前のように溶け込んでいた風景だったが、今の智也にとってはじめじめした、気持ち悪い異形の空間と成り果てていた。
　行くべき場所が智也には分からなくなっていた。高校生の規則通りに従えば集会が終わった後に教室に行くのが正当なことなのであろうが、そんなことは智也にはすでにどうでもいいこととなっていた。
　こうしている間も一之瀬のことが頭をちらつかせる。彼は屋上の景色が好きだった。屋上から見える太陽や感じられる風が好きだった。智也も同じであった。あの風景の中に居る時だけは他では得られない安らぎを確かに感じていた。
　そこで智也はあることを思い出した。
　「そうだ、あの河原……。」
　智也が思い出したことは一之瀬と智也は初めて言葉を交わした場所であり、屋上に来るまではよく智也が通っていた河原のことだった。
　あそこは智也にとって、一之瀬の屋上と同じような場所である。静かで、いるととても心地の良い場所。屋上に行くようになってからはあまり足を運んでいなかったが、あの場所なら行けるはずだった。屋上と一之瀬が失われた今では智也にとってそこが唯一の場所のように思われた。この時智也は屋上の代わりとなるものを自分が一番欲していることに気が付いた。
　「いかなきゃ……、これ以上ここに居たら、僕は窒息してしまう……。」
　智也はふらつく足取りで立ち上がった。一度思い立ったが早く、智也はすぐさま河原に向かうた

めに学校をでた。形式的には早退という形になり、保険の教員や担任の許可がないと、本来ならば早退できないのであろうが智也はそんなことは気にもしなかった。帰りのバスに乗り乗り込んだ。この時間に制服なのでバスの運転手の年老いた男は怪訝そうな顔をしたが、すぐに興味を失ったらしくバスは通常通り、智也を乗せて出発した。

智也はバスを降りた。いつもなら河原には予備校のけりに立ち寄ることが多いので、自転車で河原に向かうことがほとんどなどだが、家に帰って親と鉢合わせるわけにもいかないので智也は歩きで河原に向かった。
歩いている途中も学校に居た時と同じような気分になった。道行く人がちらりと物珍しげに智也を一瞥していたことが智也にはとても不快なことに感じられた。とにかく一秒でも早く智也は河原に向かった。

夏の季節とは違い、秋の風が気持ちよく吹く河原。現代では久しい、虫の声もまだ健在である河原に智也はようやくたどり着いた。目の前には少し濁っているが、まだまだ遊び場として使える水面が太陽の光を反射してキラキラと輝いていた。
智也は少しばかり汗をかいていたが河原につくと非常に涼しく感じられ、汗も引いていった。そしてなによりも屋上に来る時と同じように、圧倒的な解放感があった。まるで砂漠でようやく水にありつけたような心地だった。心が清められていくようであった。風が心地いい。
智也はゆっくり腰をおろした。草木がくすぐったいがそれもまた気持ちよく感じられた。しばらくは何も考えずに川のせせらぎを聞いて、ぼーっと智也は流れる川を見つめていた。
「……。」
河原には目の前の川とサラサラと吹く風、時折聞こえる虫の音だけが存在していた。智也が今までいた場所とは違いここには智也を圧迫し、不快にさせるものはないように思われた。屋上と同じである。もうどれくらい時間が経ったのだろうか。智也は時間が経つことをすっかり忘れていた。
「はーっ。」
智也は草むらに背中をつけ寝っころがった。背中がちくちくした。目の前にはいっぱいの空が広がった。広がる空を見つめながら智也にふとある一つのことが唐突に頭に思い浮かんだ。
それは一之瀬のことであり、智也の彼に対する一つの回答でもあった。今まで家でずっと考えていたが、決してたどり着けなかった回答。それは屋上やこの河原でしか分からないことだったのだ。その回答を智也は声にだし空に投げかけた。
「一之瀬……。お前はこの空に行ったんだな。」
風が少し強めについた。智也の目の前で、風で飛んできた木の葉が一枚横切った。智也の回答に応えてくれたのだろうか。夢みたいな話である。
一之瀬は自分の周りの醜悪さに気づき、絶望していたはずだ。造られた言葉や価値観、そんなものがひどく醜悪に感じること。それは智也が一之瀬に気付かされたことでもあった。一之瀬はそれをずっと感じていた。消えてくれない醜悪な「壁」。そんな中に一之瀬はずっと閉じ込められ

ていた。
　智也は閉じこまれていることに気付いてすらいなかった。いやむしろそのほうが幸福だったかもしれない。少なくとも閉じ込められていることには気づかないのだから。実際、智也は気が付いてからはずっと息苦しいままだった。
　そんな息苦しい壁の中で恐らく一之瀬はひとつ、とてもきれいなものを見つけた。それが今智也の目に映る一面の空だ。いつも見ている空だが、「壁」に閉じ込められることに気が付いてからはこの空はとてもきれいに瞳に映った。
　空には嘘がない―。
　「壁」と違って圧迫することも、押し付けるようなこともしない。自分を縛り付けることもしない。
　空はただそこにあるだけで、とても美しかった。風も、昇っては沈んでいく太陽も―。
　そのきれいさに一之瀬と智也は心を奪われ、救われた。
　そして一之瀬はこの醜悪な地上についに耐えきれなくなったのだろう。そして羨望した空のところに行きたくて、とんだ。だからあれは飛び降りたのではなく、一之瀬は空に翔んでいったのだ。

　智也は目を閉じる。
　本当に空の向こう側に一之瀬がいるような気がした。
　これらは全部智也自身が勝手に考え出した妄想の類名の子も知れない。他の人が聞いたら阿多者おかしいやつだと思われるかもしれない。本当は、一之瀬はそんなことを考えていなかったかもしれない。
　―だが、今の智也にとっては紛れもない本当のことだとしっかりと思えた。なぜだか智也にはそれを確信することができた。
　目を開きまた空に訊いてみる―。
　「一之瀬―、そこは気持ちのいいところなのかい？」
　今度は風もこたえてはくれなかった。時間がゆっくり流れていく。微睡の中に居るようだった。心が軽く感じた。
　だが、それもやがては終わりを告げるということを智也は知っていた。ずっとここにはいられない。家に帰らなければならない。恐らく今日の無断の早退で滝本が家に電話でもかけているだろう。面倒くさいことになりそうということは嫌でも想像できる。そして明日が来る。明日が来たらまた学校に行かなきゃならない。そしてそこであの不快な海の中で呼吸をし、過ごさなくてはいけない。そしてようやくその長く、息苦しい時間が終わると、家に帰る。もしくは行きたくもないような場所に行くこともある。これがずっと繰り返されていく。やがては今通っている学校も卒業するのだろうが、また次の学校に行き、最終的には学校の代わりに会社なんてものが待ち受けており、そこで永遠と働き続ける。そして、やがては死んでいく―。
　この場所に来ることもやがてはできなくなってしまうのだろう、あの屋上のように。
　だが、智也は生きていく。消えない「壁」の内側で、不快感を享受しながら―。

逃げ場など、どこにもない。
そこまで考え、智也は小さく呟いた。
「僕もそっちに行こうかな……、一之瀬。」
一瞬智也は自分でも驚くような思考にとりつかれた。智也は体を起こした。さっきまでと変わらないきれいな川がある。
そこにいけば消えてくれるのだろうか―。
しばらく智也は考える。そして少し時間が経ち、短くなってきた日も暮れかけてきた頃、それは不可能だということを智也は悟った。
「僕はさっき家に帰ること、学校に行くことを当たり前のように考えた―。」
智也はうつむきながら独り言を続けた。この場所だから言葉にできたのだ。
「僕はそっちに行けないよ、一之瀬……。」
智也は泣きそうになった。思わず顔を膝に埋めた。
「僕は君よりもずっと長く壁を受け入れていたんだから。」
声が震えた。だが止めることはできなかった。智也は自分の心の奥でずっと凍らせていてきたものが溶け出していくのを感じた。そしてそれは智也の心を犯してく。
「僕は、中途半端なんだ。一之瀬みたいに飛ぶことも、壁の中で息をひそめて生きていくことももう……、できない。」
「ぼくはどうすればいいんだ、どこに行けばいいんだ、消えることも、生きることもできない……。」
吐き気が込み上げる。智也は我慢しきれなくなり、近くの草むらで吐き出してしまった。胃の中には何もなく、ただ胃液だけが吐き出された。ただ強い酸のにおいがした。
涙が出ていた。ただ一人誰もいない河原で智也は涙を流した。智也の頭上には暗くなり始めた空があった。その空は当然何かしてくれるわけでもなく、今迄通りただ智也を見下ろしていた。

青い壁　十月十一日

十月十一日

　智也は保健室にいた。昨夜は両親から何か色々なことを言われたが特に智也は覚えていなかった。両親から解放されると昨日はすぐに床に着き、深い眠りについた。
　そしていつも通りに登校した。だが、二限目からまた気分が悪くなり智也は耐えきれなくなったので保健室で休んでいた。しばらくすると滝本がやってきた。
　「今日はもう帰れ。ご両親にはもう連絡してある。やっぱり一之瀬のことが尾を引いているのだろう。少し落ち着いてから学校に来なさい。」
　滝本は一方的にそう言い、連絡事項だけ告げると長居はせずに立ち去った。恐らくは授業中で忙しかったのだろう。
　そうして智也は鞄を持って学校を出ることになった。よく考えたら、もう一週間以上学校でまともに過ごしていなかった。そのことに智也は気づくとなんだか笑いがこみあげてくるのであった。
　智也はバスに乗り、まっすぐに家に帰った。母親の頼子が智也を心配そうに迎えた。
　「おかえり。体調は大丈夫？やっぱりお友達のことショックだったわよね。今日はもう部屋で休みなさい。何かほしいものがあったら何でも言いなさい。」
　「うん。ありがとう。少し横になってくるよ。」
　智也はそう言うと、部屋に戻った。母の心配そうな視線を智也は感じた。
　自分の部屋に戻った智也は制服も着替えないでベッドの上に横になった。何も考えたくはなかった。とにかくここにいるのは嫌だったので智也は目を閉じ、夢の中に行こうと努めた。中々眠りは訪れてくれなかったが、しばらくしたら日差しの暖かさに抱かれて、智也は夢の中へと旅立った。

　変な夢を見た。
　夢を見ているという自覚は智也にはなかった。その夢の中で、智也は町の中を歩いていた。ショッピングモールのようだった。だが智也が知っている街ではなかった。あたりに人がいる。夢の中だからだろうか、周りの人の顔は黒くぼやけているようだった。それはなんだか気味が悪かった。そんな中で智也は一人たたずんでいた。
　ぼやけている人影の中に一人、顔の見える人がいた。翔太だった。なんだかずいぶん久しぶりに見るような気がした。智也は翔太に近づこうとした。ここからなら少し大きな声をあげれば翔太も気が付くはずの距離のはずだった。智也は声をあげようとした。
　「ーーーーーーーー。」
　その声は発せられることはなかった。智也は少し戸惑ったが、翔太のところまで直接向かうことに決めた。向かおうと思った矢先に智也は通行人にぶつかりそうになりよろけてしまった。「すいません。」と、反射的に声が出かけたが、その声も発せられることはなかった。翔太のいた方

向をもう一度見る。だが、翔太がいたはずの場所には違う人間が経っていた。その顔は黒くぼやけていた。何が起こっているのか智也には分からなかった。
　そこで智也は気がついた。それはふと自分の手が視界に偶然入った時であった。智也の手は黒くぼやけていた。それはここの周りの人の顔がぼやけているのとおなじであった。
手だけではなかった。よく見てみると、足も腹も黒くぼやけていた。
　智也はその黒くぼやけている自分が怖くなった。智也は駆け出した。ここにはいるべきではないと直感的に感じたからだった。また、こんなことは有り得ないと必死に否定したいからでもあった。
　しばらく走り、息が切れてきたところで智也は立ち止まり、膝に手をついて、目をつぶったまま、呼吸を整えようとした。目をつぶったのは自分の手や足を見たくなかったからだった。
　呼吸が落ち着いてくると智也は自分の体を見ないように目をゆっくり開いた。だが、目の前にあったのは大きな鏡であった。智也はいやがおうにも、自分の姿を直視することになってしまった。
　その鏡に映った、自分だと思われる姿を智也は見た。それを見た時、智也は猛烈の吐き気が込み上げた。
　全てが黒くぼやけていた。自分お顔も分からなかった。それは異様な不快感を醸し出していた。智也はこらえきれなくなりウ、座り込んでしまった。その姿は異様であったが、同時に見覚えがあるようなものにも感じた。わけが分からなかった。ただそれはずっと見ていることはとても耐えられるものだはないことは確かであった。智也はこれが自分の姿だとは思いたくもなかった。人の姿とも思えなかった。それはまるで生きている感じがしなかった。
　そして智也は見た。
　それは鏡の中からのっそりと出てきた。智也は目を見開いた。逃げようとも思ったが体は全く動いてくれなかった。ゆっくりとそれは智也に近づいてきた。
　それが智也の目の前に立った。智也は震えていた。口の端からだらしなく液体が垂れていた。だがそんなことはどうでもいいことであった。
　それはゆっくり智也に向かって両手らしきものを向けてきた。その両手らしきものが智也の体を抱きしめるように回した。その姿は抱擁されているように見えた。そしてそれは徐々に智也の中に入ってきた。
　それは気持ち悪いものだった。受け入れたくないものだった。
　智也はもう取り込まれていた。いや、同一化していた。
　智也はだんだんと意識が薄れてきた。
　もう智也はほとんどそれと一緒になっていた。
　薄らいでいく意識の中、智也は一之瀬の姿を見た。
　一之瀬はいつもと同じの制服の格好で、智也を見つめていた。その姿は智也とは違い、黒くぼやけていることなんてなかった。一之瀬の智也を見つめる瞳は悲しんでいるように見えることもなく、憐れんでいるようにも見えた。
　そして一之瀬はくるっと背を向けて智也から離れていった。

智也は一之瀬の名を叫ぼうとした。だが、その声はやはり発せられることはなかった。手を伸ばしたが、それだけで意味のない行為となった。一之瀬の姿が小さくなっていく―。
智也の意識は限界に近づいていた。一之瀬の姿はすでに小さな点となりかけていた。
消えかかっている意識の中、智也は一之瀬の姿を追うことをあきらめた。そして智也が最後に見たのは青い空だった。
その空は智也の姿とは違ってとてもきれいに見えた―。

そこで智也は目を覚ました。寝汗をかいていたからか、体がべとべとして気持ちわるかった。すぐさまトイレに駆け込み智也は吐いた。吐いた後、部屋に戻った智也は再びベッドに横になった。
「なんだよこれ……。」
智也は小さく呟いた。窓を見ると空がオレンジ色になりかけていた。その空を見たら、智也は少しだけ気分がよくなったように感じられた。
智也はその空がオレンジ色に染まり、暗くなっていく空をずっと眺めていた。そうしていることで気分が少し良くなった。
その晩は母が作ってくれたおかゆを食べ、また部屋で横になって、空を眺めていた。星がきれいだった。しばらくして智也は一つ決めた。それは明日、学校に行くふりをしてあの河原に行くことだった。母にそのことを告げると心配していそうだったが、とりあえず了解してもらった。
明日の準備をし終わり、智也はまた横になった。その夜はほとんど寝れず、智也はずっと星が輝いている空を窓の内からずっと眺めていた。

青い壁　十月十二日

十月十二日

　智也は家を出た。家を出て少し学校に向かうふりをしたら、河原に向かう道に戻った。途中で昨日の夜にメモしておいた、学校の番号に携帯電話で掛けた。その電話で今日は欠席するということを滝本に伝えた。智也の生まれて初めてのずる休みだった。思ったよりも後ろめたい気持ちはなく、智也は不思議と気分が高揚していくのを感じていた。
　こんな朝早くから河原に行くのは初めてのことだった。智也は歩きながら、河原のことに思いをはせた。
　あの河原にはじめていたのはもう年齢も覚えていないような年頃だった。定かではないが多分小学生の頃だった気がした。
　普通、小学生ぐらいの子供があのような誰もやってこないような場所なら、最初に見つけた子供が友達に教えて、秘密の遊び場か、秘密基地の拠点となるのが恐らく普通であろう。だが智也は違った。智也はこの場所を見つけた時は、誰にも教えないようにしようと思った。友達にも親にも教えたくはなかった。それは子供が大切な玩具などを宝物にし、他の人に触らせないようにするのと同じような感覚であった。
　智也はこの河原を自分だけの場所にしておきたかった。そして智也は子供のころからこの河原に智也以外の人間が出入りしているところを見たことがなかった。そのことから完全智也だけの場所だと、智也は思い込むようになっていった。
　そして、小学生のころから現在に至るまで、河原にはいつも智也ひとりで行き、誰にも悟られないように智也は務めてきた。何故こんなにも秘密にしておきたかったのかは智也自身にもはっきりと答えられないことだった。
　しばらくそんなことを考えていると、いつの間にか、智也は河原にたどり着いていた。
　今日も涼しい風が河原に拭いていた。川のせせらぎが心地よく聞こえてくる。智也は、ほっとした気持ちになり草むらに腰をおろした。
　ここに来ると嫌なものをきれいさっぱり風が持って行ってくれるような気がした。朝の時間帯だからだろうか。水面がいつもよりキラキラ輝いていて眩しいくらいだった。十分に景色を眺めたら、智也は草むらに背中を預け、仰向きになった。
　自分の部屋にいる時よりもずっと心地よく感じた。もうすぐ寒い季節になっていくのだが、今日は雲も少なく太陽の日差しを余すととこなく浴びることができた。
　暖かい日差しに誘われたのか、昨夜あまり眠れなかったせいなのか、智也に気持ちのいい睡魔が誘ってきた。
　智也はその誘いに簡単にのってしまった。瞼が重くなる。智也は微睡に堕ちていく。今日はもう昨日の夢のような夢は見ないだろうと何故だか確信できた。だがその確信もすぐに微睡の中に溶けていった―。

目を覚ますと少しばかり汗をかいていた。だが部屋の中で寝た時にかく汗とは違いなんとなく心地のいい汗だった。ぼやけている智也の頭を覚醒させたのは太陽の日差しだった。太陽はもう智也の真上に昇っていた。
智也は体を起き上がらせ、目元をごしごしとこすった。どれくらい眠っていたのだろうか、携帯で時間を確認するともう少しで十二時になるところだった。そういえば少し空腹のような気もする。昼はどうしようかなど智也はぼんやり考えることにした。
だが、そんな考えはすぐに吹き飛んでしまった。その原因は足音である。この静かな河原では、川のせせらぎ以外聞こえてくるものはほとんどなかった。たまに車のエンジン音らしい音が聞こえてくるくらいである。
草と土を踏む音だった。河原は静かなので簡単に智也は分かった。しかもその音は徐々に大きくなり、智也の場所に近づいてきているようだった。ここからでは草が茂っていて周りがよく見えなかった。
「ど、どうしよう……。」
智也はすっかり目が覚めてしまった。人が来るなんてことは今迄なく、智也はひどく動揺した。この場所に自分以外の人間が来ることが智也には受け入れがたいことだった。それは智也に生理的嫌悪感を抱かせた。右往左往しかけている智也だが、ここで有り得ないことを呟いた。
「もしかして、一之瀬……？」
そんなことはありえないことだった。だが、何故だかは分からないが智也は一之瀬がきたかと思ってしまったのだ。なぜならこの場所は、ほんの一か月くらい前から、智也だけの場所ではなくなっていたからだ。一之瀬もこの河原の場所が好きだった。あの屋上と同じように。だからここに来るのは一之瀬なのではないのかと智也は思ってしまったのだった。それが有り得ないことだったとしても。
だがそんな妄想に近いものは簡単に打ち破られてしまった。足音の主が智也の目の前に現れたからだった。
足跡の主は無精ひげを生やした大柄の男の人だった。首に手拭いをかけていた。シャツは黒く汚れているところが点々とあり、すぐに智也は土木関係、または工事か何かの人だということを悟った。
大柄の男は智也を見て驚いているようだった。当然この二人は面識があるわけではなく、二人ともこんなところで人に出くわすとは思ってもみなかったからである。先に口を開いたのは大柄な男の方であった。
「兄ちゃん、こんなところで何やっているんだ？」
智也は返事に困ったが、別に嘘をつく必要もないので素直に答えることにした。それに突然現れた大男に、智也は少し委縮していた。
「えーと、その……、昼寝をしていました。」
嘘偽りのない真実であった。大男はそれを聞き、きょとんとしていた。
「昼寝？今日は平日だろ、学校はどうした？」
智也はここで自分が制服姿だということに初めて気が付いた。そして目の前の大男の迫力に智也

は動揺していた。
「あー、えっと、その……学校はあったんですけど……。」
　智也が口ごもる。
「なんだ。さぼりか。いまどき珍しいな。」
　大男は少しだけ笑って言った。大男に智也のことをとがめる気はないようだった。思っていたよりも怖い人ではないようであった。
「そうか、そうか、確かにここで昼寝でもしたら気持ちいいかもな。」
　大男は大きくうなずいている。
「でも悪いな、兄ちゃん。今すぐここから立ち去ってほしいんだ。」
　智也は動揺した。
「えっ……、な、なぜですか？」
「あー、会社の偉い人がだな、観光やらなんやらで、この河原を開発してバーベキュ場にしちまおうって言って、ここ一面を工事することになったんだ。んで、俺はその工事の下見に来たってわけだ。まぁ、お前さんが昼寝しちまうほど奇麗で静かなところだからな。それなりに客にうけると、お偉いさんは思ったんだろ。」
　智也はぼんやりと男の言うことを聞いていた。
「そうだな、だいたい、あと一週間もすればここは立ち入り禁止になっちまうな。悪いな」
「……。」
　智也の頭は真っ白になっていた。ただある事実だけはしっかりと頭の中に浮かび上がっていた。
　―この場所がなくなる。
　智也は呆然となった。大男が少し不思議そうに呆然とした智也を大きな目で見ていた。
「どうした？そんなにショックだったか？まぁ、分からねえでもないけどよ。」
　―ここがなくなる。屋上に続き、この場所も。
智也は地面から川のほうに目を向けた。そうするとさっきまで綺麗だと思っていたこの景色が途端に無味乾燥なものに智也は思えてきた。
「そうですか……。すいません。すぐにここから離れます。ご迷惑おかけしてすいませんでした。」
　智也はそう言って、大男にお辞儀をした。大男は智也の丁寧な態度にきょとんとしていた。
「えっ、いや、別にかまわねぇよ。こっちこそ悪かったな、昼寝中に。」
「いえ。すいませんでした。失礼します。」
　そうして智也は足早に河原から出て行った。その様子を大男は不思議そうに眺めていた。
「あんな真面目そうなやつがサボりねぇ……。」

　河原から離れた智也は今更学校や自宅にも帰るわけにもいかないので、行く当てもなく町のはずれを彷徨っていた。途中に智也は空腹に気が付いた。いつの間にかもう午後二時を回っていた

。智也は適当に見つけたコンビニで適当にパンと水を買って空腹を満たした。その後は相も変わらず、町を彷徨っていた。ずっと町を彷徨っていたせいか足が棒のようになっていることに気が付き、途中で見つけた公園のベンチで一休みすることにした。
　智也はただ道行く人々を眺めていた。そんな中で虚ろながらに考え事をし始めた。

　もう、屋上も河原にも行けない。なら自分はどこに行けばいいのだろう。
　明日からも当然学校はある。またあの億劫な空間の中に身を置かなければならない。
　自分がこんなにも変わってしまったのだからって、世界は変わってくれるわけではないのだ。世界は自分に無関心で、欲しているのはいい大人になれるだけの人間だ。
だからどこにも行けない。自分は壁に閉じ込められているのだ。
いつからこんなことを思うようになってしまったのだろう。いつからこんな風になってしまったのだろう。
　智也はだらしなくベンチに身を預けて、空を見上げた。
　―いや、きっと、ずっと前からそうだった。自分が変わったわけではない。ただ勉強をして、両親や教師たちのためにふりをしていただけなのである。だってそのほうが楽だった。
　でも気づいてしまった。きっかけは一之瀬であったけれどもこれは自分の問題だった。一之瀬は行き場のない気持ちを屋上で満たそうとしていた。自分も同じだった。でもそれはその場しのぎであるだけで、逃げられるわけではなかった。
　自分はずっと目をそらしていた。死んでいるように生きていた。そして何かを忘れ、何物にもなれなくなってしまった。
「ははは、なんだ。僕はなんだ。」
　智也が乾いた笑い声をだす。智也の叫びをきいてくれるものなどどこにもいなかった。
　そして智也は一之瀬のことを考えた。
　一之瀬は空に行くって言っていたけど、実際は行けるわけがない。今思えばあまりにも馬鹿げている。

　でも僕にはそんな馬鹿なこともできない。
　一之瀬は立派だった。彼はきっと何かになれたはずだ。でなければ最後にあんな笑顔ができるはずがない。僕なんかよりもずっとましだ。
　クラスの連中もみんな同じに見えて、くだらないものに感じた。翔太も鬱陶しかった。自分はもっとくだらない人間なのに。彼らのほうがまだましだ。何かになれなくても気が付いていなければいいのだから。
　「ははっ。ほんとに最低だな、僕は。」
　智也は空を見るのをやめて、地面を見た。小さな虫がそこにはいた。何かはわからない。だけど一生懸命に地面を張っていた。
　―僕は虫けら以下だな。
　智也はそう思って目を閉じていると、疲れたのか少しばかり眠ってしまった。

　目覚めても特に変わったことは何もなかった。当然である。智也の死んでいるような心も変わっていなかった。
「……帰ろう。ここに居ても意味ない。」
智也はベンチから立ち上がり、少しふらつく足取りで家路についた。あたりはもう暗くなりかけていた。
家に帰っても、母親は智也が普通に学校に行っていたと思っているので、特別に何か言われることはなかった。智也は水を飲んで、早々に部屋に戻った。
部屋に戻ると、出かける前と何も変わらない風景がそこにあった。智也は立っているのも気怠く、すぐにベッドへ体を沈めた。
智也には見慣れている天井がひどく歪なものに見えた。しばらくぼーっとしているとなんだかすべてがどうでもよくなっていた。明日の学校も行きたくないし、家にも居たくはなかった。
だけどもう河原も屋上にも行けない。どこにも行きたいところなどもう智也には無かった。そこで智也はふと思った。
「僕も一之瀬の所に行けるかな……。」
そうつぶやくと智也は重い体を起こし、机に向かった。そしておもむろに引き出しを引っ張った。普段はそんなに使うものではないのですぐにはしまってある場所が思い出せなかった。少し引き出しの奥を手探りであさってみると智也の手に目当てのものが触れた。智也はそれをつかんで、引き出しから手を引いた。
目の前にあるのは金属の鈍い輝き、その金属部分には智也の虚ろな瞳を映していた。智也の手に持っている者はカッターナイフだった。もうすでに刃は出ている。
智也はベッドに戻って腰をおろした。そしてカッターナイフの刃を手首に押し当てた。
―これを強く縦にひいたら全部終わる。もう苦しまなくて済む。嫌なものを見なくて済む。ここから抜け出せる。
智也は目を強くつぶった。

「……。」
智也の体が震える。目には涙がたまっていた。智也はカッターナイフを壁に投げつけた。カッターナイフは無様に壁に当たり、音を立てて落ちていった。
「だめだ……。僕には無理なんだ。」
智也の目から涙がしたたり落ちる。智也は慟哭する。
「もう何かになることもできない……。死ぬことも、生きることもできない。どうしようもない。」
その晩智也はずっとベッドに突っ伏していた。もう、なにもかもどうでもよくなっていた。自分を覆う壁なんて、全て無くなってほしかった。だがそんなことは有り得ず、虚しく時だけが過ぎていく。
もうどれくらい時間が経ったのか分からなくなったあと、智也は自然と睡魔という闇の中に堕ち

ていった。

青い壁　十月十三日

十月十三日

　智也は目覚めた。智也は気づいていなかったが、赤く目を腫らしており、目が血走っていた。智也は自分が制服のまま眠ってしまったことに気が付いたが、そんなことはどうでもよかった。ふと目に昨夜のカッターナイフが昨日のまま床に落ちていた。しばらくそれを見つめていたが、すぐに昨日と同じ鞄を持ち、部屋を出た。
　どうやら起きた時間はいつもより少し遅く、母親もパートでもう家を出ていったようであった。テーブルには書置きがあった。朝食は冷蔵庫にあるということだったが、智也は食欲もわかなかったので、すぐに家を出た。
　いつも通っている道がひどく無機質なものに見えた。足取りもひどく重く感じる。ふと、智也は足を止めた。足が前に進まない。どこにも行きたくない。
　智也は元来た道を少し戻って、通学とは違う道に入っていった。
　目的などなく智也は彷徨っていた。学校のことなんて頭の中になかった。
　どれほど歩いただろうか。気がついたら昨日来た公園に智也はいた。特にすることもなく、少し疲れてしまったので、昨日と同じようにベンチに腰をおろした。
　風が少し冷たい。気がついたら夏が終わっていた。
「……。」
　季節は移ろっていく。気が付く暇もないほどに早く時が過ぎるのは思っているよりもずっと早い。最近少しさぼり気味だが、智也もあと一年半で高校を卒業する。進路はどうなるかわからないし、今は何の関心もないが、恐らくはどこかの大学に行く。日本では珍しくもなんともない、ありふれた進路。もちろんそうでない人もたくさんいるだろうが、智也には分からないことだった。
　だが、特別に何かが変わるわけでもない。高校の教室が大学の教室に変わるだけだ。自分自身は何も変わらないだろう。そんな確信が今は智也にはあった。
　そしてやがては大学も終わり、どこかの会社か何かに就職する。まだ見たこともないが大学の教室が、会社のオフィスに変わる。そして働く。想像もつかないが結婚なんかして、子供なんてものもできる日が来るのだろうか。そして年を取り、やがては死ぬ。
　それのどれも今の智也には無意味で、つまらないものに思えた。そんな人生を歩むために膨大な時間を消費していく。そんなことがなんだか智也には滑稽に思えた。
　だが、やがては智也もそのレールを懸命に歩かなくてはいけない。もうそうするしかないのだ。どこかに楽園のような人生が待っているわけでもないし、望むものもない。
　―虚しい。
　ただ虚しかった。
　世界はどこまで行っても灰色で、無意味なものに思えた。
　どうしてこんな風になってしまったのだろう。なぜあの河原や屋上の空にあんなにも心をとき

めかせたのだろう。智也には分からなかった。
　今日の空は青く奇麗だ。智也はあんなに好きだった空がなぜか急に憎たらしいものに思えてきた。
　どうしてそんな奇麗くせに自分をいつまでも見下ろしているのか。智也は空がせせら笑っているように感じた。
　―見上げると一面の空。智也は青い壁に閉じ込められていた。
　この壁の中で自分は死んでいるように生き、やがては本当に死ぬ。それだけは嫌だった。
　あぁ、本当にどうしてこんな風になってしまったのだろう。智也は虚ろな目で青い壁を見上げながら、思いをはせていた。

　そして、智也はふと気が付いた。
「そうかこの町や、風景がこんな僕を作ったんじゃないか。」
智也の口元が歪む。
それは偽物とはわかっていても一つの答えのように思えた。
「僕を取り囲むものが、僕を作った。この胸の虚しさもそうだ。なんだ、簡単な事じゃないか。」
　智也は不気味に笑っていた。道行く主婦らしき人が智也ベンチに座っている智也を気味悪そうに見ていた。智也はそんなことには気にもかけなかった。
　「なら、どうしようか。このまま不様に死んでいくのもなんだか悔しいじゃないか。」
　そして智也はあることを思いついた。それは智也にとって今まで感じたことのないくらい面白いもののように思えた。それは―
　「この壁に傷をつけてやろう。」
　そうだ。智也の周りにある壁はずっと智也を取り囲み、圧迫してきた。だから一回ぐらい反撃に出てもいいではないか。うん。そうだ。
　けどそんなことをしても何も意味はないだろう。そんなことは智也にだって分かっている。決してこの壁からは逃げられない。
　だから、今智也が考えていることはひどく無意味なものに違いないのだ。
　間違いなく世間は嘲笑い、頭のおかしい奴だと非難するであろう。
　―だが、構わなかった。

　あの一之瀬のように智也はなれない。
　それは涙が出るくらい智也にとっては悔しいことだった。
　一之瀬はすごい奴だった。彼はしっかりと答えを示し、実行し、完遂した。
　あの自殺はきっと意味のない行為だったのだろう。
　そして恐らくは、一之瀬にもわかっていたに違いない。智也はそう確信できる。
　だがその一之瀬の行為は、本当に尊敬に値することだと智也は信じて疑わなかった。
　智也にはできないことだった。

けど智也もこのままではいられなかった。このままこの壁の中で窒息するように死んでいくのは嫌だった。
一矢報いてやりたかった。
この壁を、今まで嘘で塗りたくられた壁を。この憎たらしいくらいの青い壁を。

ここで智也は決心がついた。
頭が軽くなった。智也はベンチから立ち上がり、公園を後にした。

智也は学校にいた。もう授業開始からずいぶん時間が経っていた。校庭には体育の時間であろう生徒たちがジャージ姿でソフトボールを行っていた。
智也は校庭にいる生徒らに目立たぬように、校庭のはずれにある体育館倉庫に向かった。
そこで智也は目当てのものを見つけた。それは少し年季の入った金属バットだった。智也は軽く素振りをした。少し冷えた金属の感触や、振り具合に満足し、智也はこそこそと体育館倉庫を後にした。
その後智也は校内へ入っていった。バットを片手に持ち智也は誰にも見つからないように校内を歩いて行った。今、学校は授業中であるので、教室や職員室などに近寄らなければ、他人と遭遇することもなかった。
向かった先は閉じられた屋上だった。智也は周りに十分注意を払い、周りに人がいないことを確認して、屋上の扉に向かった。扉は前に来た時と同じように、鍵がかかっていて、一之瀬からもらった鍵では扉は開かないようになっていた。
智也は数回ドアのノブをいじった後、一歩後ろに下がった。いやな汗が背中にへばりつく。智也はもう一度深く呼吸をした。
そして智也はバットをドアに向け、叩き付けた。
すさまじい音が鳴り響いた。智也は扉が壊れるまで何度もバットを叩き付けた。
何回か叩き付けた後、何かが外れるような音がした。智也はバットを振り下ろすことをやめ、片足で思いっきり、扉をけった。
そして、扉が開いた。

そこにはいつもと変わらない空があった。
智也は屋上の中心へ向かった。
そして空を眺める。
もう何も感じない。
いや、むしろ憎く感じた。
いつもそうだ。この空さえ。
この空も同じだ。

壁となんら変わりがない。
いつだって閉じ込めている。
どこにもいけない。
死ぬことも、生きることもできない。
どうしようもない。
それなのに空も変わらない。
ずるい。
そこに行きたかった。
救い出してほしかった。
この気持ち悪いところから。
でも、確認した。
それで十分だ。
だからもう終わりにしようと思う。
僕なりの方法で。
ようやくたどり着いた。

「はははははははははははははっ！」
智也は笑った。気持ちよかった。
そして、少し落ち着いてから智也は最後の決心をすました。
「じゃあ、行ってくるよ、一之瀬。無駄だけど、やってみる。」
智也はそう空に言い残し、屋上を去った。

扉を壊した時にすさまじい音が出たが、周りに無関心なのか、ただ単に何があったのか確認することが面倒なのか、誰かが様子を見てきてくれるだろうという、他力本願の精神からか、屋上にやってくる教師は一人もいなかった。それは智也にとっては非常に都合がよいことであった。
智也は階段を下りていった。頭はこれまでにないほどさえていた。すでに考えはまとまっていた。智也はこれからその考えを実行することが、とても楽しみだった。
ようやく智也は目的の場所にたどり着いた。
智也のクラスの教室だった。
智也は教室の扉を開けた。
教室にいる連中が一斉に智也のほうを向いた。
とても驚いているようだった。
その驚いた様子も智也にはなんだか可笑しくて仕方なかった。
教師らしき人物が智也に向かって何か喋っている。
何とも不快な音だと智也は感じた。
智也はとりあえず持っていたバットを扉に叩き付けた。
今度は屋上の扉を壊した時とはわけが違かった。

悲鳴や金切り声が教室に渦巻いていた。
その悲鳴の嵐が上がった瞬間、智也はこれまでにないほどの快感を得た。
―やってやった。この不快な壁に。やってやった。
「はははははっ。」
智也は笑い声をあげた。
今度はバットを壁に叩き付けた。
悲鳴はより激しさを増した。
間髪入れずに、次は近くの机にバットを振り下ろした。
完全に連中はパニックになった。
教室の隅に殺到する。
智也も連中の近くに近づくと、連中は智也が入ってきた扉の反対のほうに殺到した。
智也は追いかけるのも面倒になり、近くの窓ガラスをバットで割った。
そしたら、教師らしきものが何人か教室に入ってきた。
それらが何か言っているのか智也はよく聞こえなかった。どうでもよかった。
逃げ惑う連中に目を向けると、パニックで転んでいる者もいた。
教師たちはどうしていいのやらわからず、中々踏み出せないようだった。よく見たら担任である滝もとの姿も見えた。
一方では生徒の誘導している怒鳴り声が聞こえる。
同時に、自分に問いかけるような声も聞こえてくる。
―無視して破壊を続ける。
ガラスが壊れる音や、叫び声がひどくおかしい。
それもそのはずであった。
今までずっと自分を閉じ込めていたもの。
無意味で何の価値もないもの。
そんな中で平気で息をして、くだらないことを言う連中。
どうしてだ。
どうしてお前たちはそんなに鈍感でいられる？
どうしてお前たちは平気で生きていられる？
どうして毎日に耐えられる？
どうしてこの空虚な壁の中で平気でいられる？
破壊を続ける。
この行為にも何か意味があるわけではない。そんなことは智也にもわかっていた。
でもやめられない。
なぜなら不愉快だからだ。
この風景も。この連中も。目に映るものすべて。
体力が続く限り傷つけてやろう。
智也はそう思った。

そのあとは―、
そうだな―、
できれば殺してほしいかな―。
智也は微笑んでいる。
楽しい―。
ほんとに馬鹿らしくて―。
もう何度バットを振るっただろうか。休みなく振り下ろしてきたから、腕が疲れてきていた。もう腕が動きそうにない。
だが、今バットを振るのをやめたら、あの教師どもにたやすく捕えられてしまう。
どうすればいいのか。
智也は考えてみたが良い案考えは、浮かんでこなかった。
とりあえず彼らとの距離をとる。大した考えなど一つもなかった。
そうして腕が限界にきてバットを振るのをやめた。
そうすると、教師たちが見計らっていたように、智也に迫ってきた。
やはりこの瞬間を狙っていたのだろう。
―やっぱりだめか。
智也はそう思った。
でももう一振りくらいはできる。
せめて彼らにも一発当ててやろう。
智也はそう決意し、迫ってくる教師にたいして身構えた。
その瞬間、不意に後ろから誰かに、飛び掛かられた。
「―⁉」
誰か隠れていたのか？
この学校の教室にはベランダがある。
そのベランダは隣の教室につながっていることを智也は今さら思い出した。
「くそっ。」
智也は何とかして飛び掛かってきた人物を払おうとして、バットを振るった。
そして、鈍い音が聞こえた。
それはいままで壁やガラスを壊した時に聞こえる音ではなかった。
組み敷かれた腕がズルズルと落ちていく―。
気が付くと教室は静寂に包まれていた。
重く、鈍い音が智也の背後でした。
智也はゆっくりと後ろを振り返った。
智也の足元にはよく知った人物の頭があった。
そして、その頭から赤いものが広がっていくのを智也は見た。
―翔太だった。
「あっ……。」

智也はバットを落とした。
無機質な音が教室にこだまする。
どうして。
どうしてお前なんだ。
半分見える翔太の顔はずいぶん久しぶりに見るような気がした。
途端に逆らえない力が智也の後ろからふりかかる。
智也の目線が翔太と同じ高さになった。
翔太は目を閉じている。
その横顔はよく眠っていて、心地よそうに見えた。
久しぶりだなぁと、智也は思った。
周りはがやがやとひどくやかましかった。
「ごめん、翔太。」
智也はそう呟き、目を閉じた。
最後に割れたガラスの窓から見慣れた空が見えた。
智也の無意味な抵抗は終わった―。

学校という建物の一番高いところにある屋上より遥か彼方にある青い空。
人々の声がざわざわと騒いでいる地上よりも遥か彼方の空。
曇天の日や雨の日もあるがいつもそこにあり、かわらずある奇麗な空。
牢獄に閉じ込められている鈍感で愚かなもの。
空に焦がれ、飛ぼうとするもの。
悶々とするもの。
絶望するもの。
そんな人たちをこの青い壁が覆っている。
過去現在変わることなく―。
憎たらしいほど青く奇麗な空は、今日も僕たちを見下ろしている。

〈了〉

あとかぎ

ここまで読んでくださった皆様に心から感謝の気持ちを申し上げます。
もしよろしければ感想やコメントをいただければこちらも大変嬉しいです。

それでは、また次回作でもよろしくお願いします。
ありがとうございました。

著タコヤキ